

# 英国と近代？

## 三つのエッセイ

P. J. コーフィールド 著

小西 恵美／山本 千映／菅原 秀二／

中野 忠／道重 一郎／唐澤 達之 訳

# BRITAIN AND MODERNITY ?

## Three Essays

---

### Introductory Note

#### Essay 1

PROTO-DEMOCRACY: LONDON ELECTORS AND THE  
CIVIC CONSTITUTION 1700-1850

#### Essay 2

NAMING THE AGE: HOW BRITONS IN THE  
EIGHTEENTH CENTURY SAW THEIR OWN TIMES

#### Essay 3

HISTORIANS AND THE RETURN TO THE BIG PICTURE

---

By

PENELOPE J. CORFIELD

JSPS Grants-in-Aid for Scientific Research:

Research Project Number:18330075 (FY2006 - FY2008)

Printed in Japan, by Waseda University, MD Corner  
2009 July

本訳書の著者、ロンドン大学 P.J.コーフィールド教授は、平成 18～20 年度科学研究費補助金（基盤 B）のプロジェクト（課題番号 18330075：

「18 世紀イギリス都市における市民的社交圏の形成—地域社会、消費文化、貧困—」）により来日され、2007 年 5 月 19 日から 6 月 3 日までの滞在中に、早稲田大学、東洋大学、専修大学、北海道大学、東北大学で 8 回にわたってセミナーおよび講演を行なわれた。帰国後、教授はセミナーやその後の討論の内容を踏まえて、報告原稿に改訂を加えられた。本冊子はこの改訂原稿を翻訳したものである。翻訳はプロジェクトの共同研究者が分担して行なった。

緒言で触れられているように、収録された三つのエッセイを貫く一つの基本的テーマは、「長期の時間」である。いずれも短いものだが、ここには研究者としてだけでなく、教育者としての経験にもたった、コーフィールド教授の最新の、また現在進行中の研究成果の要点が紹介されている。そのなかには、18 世紀イギリス史、さらには歴史学全体の新しい研究領域や方向性を考えるための重要なヒントがちりばめられている。英語版はすでにプロジェクト関係者やセミナー参加者など少数の方々に読んでいただいているが、この翻訳によってもっと広い読者に教授の新しい仕事やアイデアが伝わることを願っている。

本訳書は本来ならもっと早い時期に印刷すべきであったが、諸般の事情により、当初の予定より大幅に遅れてしまった。コーフィールド教授はじ

め、セミナーや講演会に参加いただいた方々、その他関係者各位にお詫び  
申し上げます。

2009年7月15日

科研費研究代表者 中野 忠

## 目 次

緒言 .....	1
----------	---

---

エッセイ 1	
プロト・デモクラシー： ロンドンの選挙人と市民的政体 1700-1850 年 .....	5

---

エッセイ 2	
時代を命名する： 18 世紀の英国人は自分の時代をどのように見ていたのか .....	20

---

エッセイ 3	
歴史家と大きな歴史像への回帰 .....	40

## 緒言

P.J.コーフィールド

---

### 英国と近代？ 三つのエッセイ

エッセイ 1 「プロト・デモクラシー：ロンドンの選挙人と市民的政体 1700–1850 年」

エッセイ 2 「時代を命名する：18 世紀の英国人は自分の時代をどのように見ていたのか」

エッセイ 3 「歴史家と大きな歴史像への回帰」

---

この三つのエッセイは 2007 年 5 月、私が早稲田大学の客員研究者として招かれた際に行なった一連のセミナーで提出されたものである。議論を展開し、セミナー後には活発な討論を交わすという、私にとって大変素晴らしい機会をもつことができた。セミナーに参加くださったすべての方々、および私を日本に招待くださった中野教授に感謝したい。帰国後、原稿は手を加えられ、セミナー後の討論に照らしてあいまいな点を直したり、加筆したりされた。もし読者のなかでさらにコメントを加えたいとか、新たな論点を提出したいとお思いの方がいれば、ぜひお聞かせいただきたい。

以下の三つのエッセイは、一見したところそれぞれがまったく別のことを扱っているように見えるかもしれない。しかし三つは一つの共通の背景をもっている。**プロト・デモクラシー**についての最初のエッセイは、以前私がチャールズ・ハーヴェイとエドマンド・グリーンとの共同研究を發展させたものである。「ウェストミンスター歴史データベース」を公刊して以後、特にエドマンド・グリーンの研究のおかげで、ウェストミンスターの歴史は、もっとずっと大きい首都ロンドンの歴史の一部に過ぎないこと

が明らかとなった。以下に説明されるような理由により、われわれはそのプロセスをプロト・デモクラシーと定義する。結局のところ、都市史はある意味をもった長期の政治的・制度的発展の過程のなかに位置づけられるものなのである。

**時代の命名**についての二番目のエッセイは、18世紀の英国を長期のまたは通時的な文脈ダイアクロニックのなかに「位置づける」という、同様の問題に、異なった視点からアプローチする試みである。この位置づけについては歴史家の間で様々な解釈があり、見解が分かれていることはよく知られている。十分研究されてきた歴史上の一時代でありながら、それについて共通の理解がまったく得られていない、ということが、長い期間というものについて私が考え直してみたいと最初に思うようになった動機の一つである。

英国史上の18世紀について、歴史家の見方を、その時代に暮らし自分の生きている時代について語った人の見方と比べてみるのが、一つの有効な判断基準になるに違いない、と私は考えた。したがって**時代を命名すること**についての私のエッセイは、「時代の命名」を蒐集することに関する私の方法論と、それら命名の全体的意味についての私の解釈を述べている。同時代の証拠は、教養ある読み書きにたけた英国人が、自分たちの時代を漸進的変化——それが賞賛すべきものであれ非難すべきものであれ——の時代と見ていたことをはっきりと示している。

この二つのエッセイは、私の専門とする18世紀に関わっている。それらは、長期的な意味合いをもつ18世紀に関するものであるが、明らかに経験的データが基礎になっている。しかし三番目のエッセイはまったく異なっている。それは歴史家や過去を研究するその他の人びとが、長いスパンの人間の歴史をいかに解釈することができるか——それは直線的に動くのか、あるいは円環にそって動くのか、離散的飛躍を通じて進むのか、それとも複雑に纏れ合った道筋を通して進むのか——という問題に焦点を合わせている。



しかし私にはこの問題に関連した研究がある。私の近著『時間と歴史のかたち』（2007年刊）で、私は「共時的なものは常に通時的なものの中にある」——つまり、短い期間は常に長い期間の中にある——という原則を説明している。したがって私の見解からすれば、歴史家は常に自分の専門とする時代をより広い歴史と関連づけるよう努力すべきだ、ということになる。18世紀英国についての論争は、その経験がより大きなストーリーにどのように当てはまるのかを尋ねてみる必要がある、ということを示している。

しかしどのような長期の枠組みを歴史家は用いるのだろうか——そしてそのモデルはどの程度有効だろうか。個人的には、私は家族と学校の影響から、経済的变化に導かれた歴史の段階論という考えに対して、あまり確たるものではないが漠然とした共感をもっていった。私は全面的に信ずることはなかったが、それに代わるもっと適当なものがないために、それは私のいわば「デフォルト・システム」だったのだ。だが長い間、私は不満をもっていった。段階理論一般、特に一つの段階から次の段階への変化の引き金になるものとして経済的要因が決定的役割を果たすといった考え方に、私は疑問を抱いていた。どちらも人間の歴史全体にとって十全なものとは思えなかったのである。その意味で、歴史家として私は「失望したマルクス主義者」であったし、今でもそうである。

第三番目のエッセイ、**歴史家と大きな歴史像への回帰**では、歴史家がいかにして通時的な時間を研究するかを再検討し、解釈の可能な範囲を吟味している。全体として、それは「長期的に描かれた」三次元プロセスとしての歴史という、私自身の新しい解釈を提示している。歴史における過去の出来事、あるいは歴史家、哲学者その他の人たちの歴史の方向性についての考え方、などにその根拠は求められている。したがってこのエッセイは、一つのメタ・ヒストリーと言えるが、しかしはっきりとした歴史的基礎づけをもったものだ、と私は考えている。

## 緒言

このエッセイは三つあわせて、ゆっくりと根本的な変化を経験した長期の18世紀の英国に関して論証を試みるものだが、そうした変化は「近代」と呼ばれる単一のグローバルな段階のなかでよりよく理解されるものだ、という見解には反する試みでもある。

エッセイ 1

プロト・デモクラシー：

ロンドンの選挙人と市民的政体 1700—1850 年

小西 恵美／山本 千映 訳

## プロト・デモクラシー：

### ロンドンの選挙人と市民的政体 1700—1850 年<sup>1</sup>

「プロト・デモクラシー」とは 18 世紀のロンドンにあてはめるために新しく作った言葉である。公的な選挙プロセスに、全員ではないが、しかし広範囲の人が参加しており、そこではある特定の期間、国会や地方行政の役職を務める公的な代表を選出するために活発な議論を交わしていたことを示す言葉である。プロト・デモクラシーといっても、それが後の時代の完全な普通選挙に必然的につながると考えるべきではない。それは完全な民主主義とは異なるし、歴史上の一つの到達点というわけでもない。

しかし 1832 年の選挙法改正以前のイギリスの混合的な政体については、まだ十分理解されていない点がある。その実態に光を当てるという点で、プロト・デモクラシーの概念はとても重要である。確かに選挙区のなかには、政治参加が少数者に、時にはほんの一握りの少数者に限られている、寡頭的なものもあった<sup>2</sup>。こうしたところは政治改革家の激しい攻撃を受け、スキャンダルの対象となった。しかし大勢の人々が参加する選挙区もたくさんあり、そのやり方は寡頭的な選挙区とはまったく異なっていた。そうした寡頭的なものとは違ったやり方については、その概要は知られているものの、これまで十分評価されてはこなかった。

18 世紀を通して、特にロンドンでは、選挙に参加する政治文化が存在し、国会議員の選挙だけでなく、都市や教区の役職に至るまで、驚くほど広い範囲にわたって選挙が行われていた。参加の世界は非常に深く広いものであり、プロト・デモクラシーの名に十分値するものであった。

この主張を実証するために、1700 年から 1850 年の間のロンドンにおける「投票行動」について残っている 50 万件ほどの記録を収録した、新しいデータベースが編纂された。そこには個人ごとに誰に投票したのかとい

## 1 プロト・デモクラシー

う情報だけでなく、選挙人の名前、住所、職業または所属するリヴァリ・カンパニーについての詳細が書かれている<sup>3</sup>。もしこの時期のロンドンで争われたことがわかっているすべての投票選挙についての記録が残っていたら、データベースはよりいっそう充実したものになったはずである<sup>4</sup>。50万というのは最低限の数なのである。ただし、この50万という数は投票総数であり、選挙人の数ではないことに留意しておかねばならない。いくつもの選挙で続けて投票した者もいれば<sup>5</sup>、他方で（ウェストミンスターやシティのように）複数の議員代表をもつ選挙区では1人の選挙人が1票以上の投票権をもっていることもあった<sup>6</sup>。

\*\*\*\*\*

ロンドンのプロト・デモクラシー的な経験について、三点、強調すべき結論がある。まず注目せねばならない一つの明らかな制約がある。それは、この時期の政治の世界は、公的にも公式にも男性の領域であったことである。1869年に一部の女性が地方選挙での投票権を、1918年には大半の女性が国政選挙権を獲得し、そして1928年にすべての女性が選挙権を獲得するまで、イギリスの政治システムは男性の領域であり続けた<sup>7</sup>。18世紀には、女性の利害関心は、理論的には男性の世帯主、その夫や父親としての権能に組み込まれていた。女性のなかには、舞台裏で、そして時には表舞台でも、政治運動家や影響力をもつ仲介者として積極的な役割を果たすものもいた。しかしながら、公的には、女性は除外されていたのだ。「投票権というものはイングランド人男性のもつ賞賛され羨望さるべき特権である。女子供、馬鹿、狂人はその特権を行使する資格をまったくもたない」と1789年にある批評家が高言しているが<sup>8</sup>、論争を巻き起こしてやろうと思って、こう言ったわけではなかった。

女性が選挙権から排除されていることは、後の時代の改良家にとっては重要な関心事であった。しかし18世紀や19世紀初頭には、ロンドンで見られたように、階級をまたいだ相互交渉が可能だったのは、政治の世界が

男性だけのものだったからであった。もしジェンダーの障壁という問題が絡んできていたら、こうした相互交渉はずっと困難であっただろう。

1700年から1850年の時期、拡大する首都ロンドン地区では、歴史家がこれまで考えてきたよりもずっと多くの役職をめぐって、はるかにたくさん選挙があった。そうしたイベントは明らかに日常的な出来事ではなかったが、にもかかわらず、選挙への参加は多くの人々が現実に経験していたことであった。

選挙権をもつ男性はその権利を様々な機会に行使できた<sup>9</sup>。まず“大”ロンドンというスプロール化する首都圏には4つの大きな国会議員の選挙区があった。1700年と1832年の間、例外的に4人もの国会議員を送り出していたシティ、2人区のウェストミンスター、テムズ川の南にあるサザーク、北部のミドルセックスである。複数人選挙区の人々は彼らの投票権をすべて使う必要はなかった。それにより、戦略的な判断を行う見通しがかなりあったのだ。というのは、投票者はもっているすべての票を使って候補者を支持することもできるし（シティの選挙人は1人4票まで、その他の選挙区では2票まで投じることができる）、「1人だけに投票 plump（18世紀特有の言葉）」してライバル候補者の不利になるよう効果的に票を使うこともできたからである。

選挙法改正以前のシステムの特徴として、こうした大選挙区の人々の選挙権は統一されておらず、選挙権の有無の線引きに関しては論争の余地があった。ウェストミンスターやサザークでは、成人男性で地方税納付者 *rate payer* ならば全員が投票権をもっていたので、これらの地域にはたいへん多数の選挙人がいた。一方、シティの投票権はリヴァリ・カンパニーと呼ばれるギルドのメンバーに与えられており、その結果、ロンドンでは商工業者や職人、専門職からなる寡頭体制が長期にわたり続くことになった。また、ミドルセックスで選挙権をもったのは、年間40シリング以上の価額の土地を所有する男性のフリーホルダーであった。その数は19世紀初めに急速に増大した。というのも、建築開発が進んだことと、それに加え、地価のインフレがおこったことで、ますます多くの男性が選挙権をもつように

## 1 プロト・デモクラシー

なったからである。

社会的にみて、こうした選挙人になれる可能性をもつ住民の範囲は、これら4つのロンドンの選挙区いずれでも広く、大部分の上流層の男性はもとより、中間レベルの「ミドリリング」層に分類される多数の商工業者や職人にも及んでいた<sup>10</sup>。ウェストミンスターやサザークでは、選挙人制度は一層多くの人たちを含んでいた。地方税支払いにより投票資格を得た者のなかには、多数の比較的貧しい職人や労働者もいた。実際、18世紀後半のウェストミンスターでは、選挙人は成人世帯主のおよそ75%にも達していた<sup>11</sup>。もしすでに投票権をもっている者は終身その権利を保持できる、とする特別条項が選挙法改正法で認められなかったとすれば、1832年の改正によってウェストミンスターでは選挙人が増えるどころか多くが選挙権を剥奪されることになったであろう。

もちろん、この時期、すべての国会の議席が投票選挙で決まったわけではないことは留意しておかなくてはならない。しかしロンドンでは投票依頼のために大きな費用がかかり、また落選の可能性があったにもかかわらず、多くの18世紀の政治家はロンドンで議席をなんとか取りたいと願っていたことは、首都の支持を得ることがいかに重要であったかを物語っている。1700年から1831年までに、30回の総選挙があったが、そのうち、ミドルセックスでは14回、ウェストミンスターでは20回、サザークでは23回、シティはでは29回の投票選挙があった。それに加え、たくさんの補欠選挙もあった。そのなかには熾烈な戦いが交わされたものもあった。たとえばウェストミンスターの2議席のうちの1議席をめぐる1788年の投票選挙は有名で、ピット内閣を支持する親議会派の候補者と、チャールズ・ジェームズ・フォックス派で反ホイッグの対立候補との間の抗争に、不人気な店舗税<sup>12</sup>のような地域の問題が絡んで、激しい選挙戦があった。

こうした選挙のすべての実投票者数を計算するのは、歴史家にとってむずかしい仕事である。1832年以前には公式な選挙登録制度が存在しなかったので、有権者の総数がわからず、実際に投票をしたと記録されている者と比較することができないのである。

## 1 プロト・デモクラシー

しかしながら、状況証拠からは、選挙が特に激しく争われたときには投票率が跳ね上がる、という当然予想しうる結論がえられる。ウェストミンスターでは二つの有名な例がある。1784年の総選挙と1788年の補欠選挙がそれで、ピット政府の支持者はライバルの反ホイッグや彼らのリーダーのチャールズ・ジェイムズ・フォックスと断固戦ったが、彼らを排除することはできなかった。1784年の投票期間は40日間続く特別長いものであったが、死亡していたか、自分の選挙区を留守していたものを除けば、全員が投票に行った<sup>13</sup>。

\*\*\*\*\*

次に、二つめの重要な点を述べていく。国会議員の投票選挙はこの時期のロンドンの選挙経験のなかで重要な要素であるが、決してそれだけが唯一のものではなかった。都市 civic レベルと教区レベルでもたくさんの多様な選挙があったこと自体が、意義深い発見である。これらの選挙はほとんど歴史家には知られていない。しかし18世紀の新聞を系統立てて徹底的に調べてみると、とても重要な新しい情報がみつかる<sup>14</sup>。

様々な選挙区や様々な機会に、首都の選挙人は、都市の役職や州の検死官、教区の役職などのポストをめぐって、毎年というわけではないがしばしば投票を求められた。教区の有力者でその任命にあたって選挙が行われる可能性があったのは、教区庶務役 beadle や治安官 constable、審問員 inquest-man、道路管理人 scavenger などであった。とりわけシティでは、リヴァリ・カンパニーの組合員は年々行われる選挙で投票する機会が幾度もあった。市長や会計役だけでなく、シェリフ、監査役、さらにはシティの市場で売られるエールの品質をチェックする吟味役のポストのための選挙まであった。ロンドン橋のブリッジマスターといった名誉職でさえ、しばしば選挙で争われた。さらにこうした選挙での技術的な問題処理はすべて、中央政府ではなく、「選挙管理役」としての役目をもつ教区または



都市の関係役職者によって遂行された、ということにも言及しておかねばならない。

明らかに、リヴァリ・カンパニーの組合員全員が毎回、労をいとわず投票したわけではない。すべての役職に関して毎年選挙が行われたのでもない。政治活動がどれくらい活発になるかは、地域の住民の活動いかんにかかっていた。国政に携わる政治家は、役職についていようがまいが、支持者を促し、様々な問題に対して行動を起こさせようと試みることもあったかもしれない。しかしどれくらい依頼したり圧力をかけたりすればよいかを決めるのは、選挙区内の住民であり、彼らは彼らで選挙区内で検討すべき課題を抱えていたのである。したがって、個人的な闘争や党派抗争が激しい時期もある一方で、政党色があまり表に出なかった時期もあった。しかし 1700 年から 1850 年の長期にわたるあらゆる証拠をまとめてみると、シティの選挙区はおよそのところ 1 年に一度、投票選挙に臨んだ。これにより、シティの選挙人は国内のどこよりも活動的で経験を積んだ選挙人となったのである。

その他の首都選挙区でシティに匹敵するところはなかったが、それにもかかわらず選挙人の範囲は圧倒的に広がった。国会や地方選挙の証拠を集めると、大まかに言って、1700 年から 1850 年の時期、首都に 100 万人いる成人男性の約三分の一が様々な機会に選挙に行き、複数人区の各選挙では 100 万票を超える票で複数人が選ばれた。このシステムのなかにいる人々にとってみれば、それは参加型の市民的文化が存在したことを意味するものである。

公開投票は、個人の責任の重要性を強調するものであった。投票人は、投票に立ち会おうと集まっている大勢の公衆の面前で投票しなければならなかった。その意味で選挙は地域社会のイベントであった。確かに、選挙人が雇い主や地主、周囲の群衆から脅されたり圧力をかけられ、この制度が腐敗したものになってしまうこともありえた。しかし公開投票の原則は肯定的にとらえられていた。自由民たるイングランド人は、立会人の前で脅えたり、自分の選択に「従う」ことに躊躇すべきではない、というわ

けである。投票権は一つの責任であり、誇りをもって行使されるべきものであった。

公開投票は、一つの制度として、多くの国で採用された。イギリスではこの制度は改革家が強行に秘密選挙を導入する 1872 年まで続いた。別の国ではもっと長く維持され、アメリカでは 1896 年、デンマークでは 1900 年、プロシヤでは 1918 年、そしてハンガリーでは何と 1938 年まで続いた。

公開投票の時代であったがゆえに歴史家が恩恵をこうむっているのは確かである。というのも通例、投票選挙では投票後に投票簿が刊行されたからである<sup>15</sup>。こうして個人の選択が、次の選挙での票集めを組織するためにこれらの資料を利用とする政治集団や政党のためだけでなく、後世の人々のためにも、記録として残されることになった<sup>16</sup>。そもそも投票簿が刊行されたということは、この情報が当時の人にとって重要であったということの意味する。公開投票の一つの興味深い結果は、過去の投票者が歴史家の予想するとおりに投票していた、ということである。たとえばウェストミンスターでは 1790 年に自分の職業を「ピットの奉公人」とした者は、フォックスに反対して政府支持派の候補者に賛成票を投じたし、1796 年には最貧層の職人の大半は、実際に、急進派の候補者ジョン・ホーン・トウークに投票していた<sup>17</sup>。

しかしそうした公的な証拠は、公的な事実しか明らかにしないことを忘れてはならない。投票時に人々がどんな秘密の信念をもっていたかはわからない。一つの顕著な例として、靴の卸売商人、ジェイムズ・ムーディーがあげられる。彼は成人男性の完全普通選挙を提唱する職人のロンドン通信協会 **London Corresponding Society** を支持し、急進的組織の幹事として活発な役割を演じた。それゆえ、公的には、ムーディーは（急進派政治家の）ジョン・ホーン・トウークに票を投じた。彼の政治活動上の友人も疑いをもたなかったであろう。しかし、ムーディーには秘密があった。彼が死んで相当経ってからの調査で明らかになったことだが、公式な記録によると、彼は政府から給料をもらって働く情報提供者であり、内密に、急

進派の組織活動について定期的に簡単な報告をしていた<sup>18</sup>。したがって、ムーディーは急進派を支持していたが、金銭その他の動機から自分の主義を曲げていたのか、それともムーディーは急進派の活動を邪魔するために潜入していた現状支持者であったのか、またはどちらに対しても確たる信念をもたない日和見主義者であったのか、歴史家は確証をもつことはできない<sup>19</sup>。

しかし、選挙での選択は、個人的な考えや感情がどうであれ、その人の公的な立場を明白に記録している。他ならぬその候補者へ投票するということは、はっきりとした決断を迫られたわけで、日常生活での慣習的な曖昧さや不明瞭さを超えた、確固とした明白な意思決定を表明することが必要となった。それゆえに、ムーディーもまた、公開投票システムの下では、徹底した急進派として知られていた。そして、大勢の人々の個人的な考えが集合して、一つのはっきりとした選挙の審判が下される。それを歴史家は、個々人のレベル、および集合のレベル、あるいは二つのレベルを組み合わせ、分析することができるのである。

\*\*\*\*\*

三つめの重要な点は、まさに 18 世紀の投票プロセスに当てはまる、この集合的なものと個人的なものとの組み合わせである。誰にも晴れ舞台に立つ時があった。選挙人は投票ブースに行き、自分の名前と住所（地方税納入者かフリーホルダーであるかどうか）、または（リヴァリマンであれば）自分の組合を告げ、誰に投票するかを宣言する。もし選挙資格に異議が唱えられると、地方税台帳か組合リストで投票権をもっていることの確認が取れるまで待たなければならない<sup>20</sup>。さらに、字が読めるかどうか、または政治的知識があるかどうかは試されなかった。必要なのは、有効な資格があるかどうかだけであり、資格さえあればどんな一票であっても他の票と同じ1票として数えられた。

同時に、ロンドンの群集は、選挙権があろうがなかろうが、公共の立会

人として選挙の場に加わり、こうしたイベントが共同体的な色調を帯びたものになることもあった。ポスターやビラがばらまかれた。そこには新しくできあがったばかりの選挙の応援歌もあれば、選挙運動中には候補者の演説もあった。この豊富な選挙関連の資料は印刷されることも多く、印刷物やビラの形で回覧された。選挙の雰囲気にはカーニバルを思わせるものがあった。群集のなかには、選挙権をもっていない男性だけでなく、女性もみられた。すべての参加者が選挙演説に歓呼し、やじを入れた。お気に入りの候補者の色の選挙用リボンをつけながら、ライバルの党派が後援するパブで飲んだ。そして、選挙結果が発表されると、勝利者の支持者は当選者を椅子に乗せて祝賀パレードをすることもあった。

実際、群集の力は時には恐怖を呼び起こすような動きになることもあった。しかしながら、悪名高い選挙後の暴動は普通のことではなく、むしろ例外的であった。1788年のウェストミンスターでは、「杖やこん棒で武装した大勢のアイルランド人の椅子かごの担ぎ手やウェールズ人の荷担ぎ人」が対立候補を応援しない見物人を脅したといわれている。しかしこれは著しく敵意に満ちた記述で、おそらく誇張されてもいる。群集が本来の投票行為を妨害した例はたった一つしかなかった。1741年のウェストミンスターでは、手に負えない暴徒が演説者や候補者に「ゴミや石ころ、こん棒、犬猫の死体を投げた」。その選挙は無効と宣言された。この場合、公衆の立会いは度を超えているとみなされたのだ。このことは、(公衆の立会いを)どこまで受け入れることができるかということに関して、一定の法的な限度があったことを示している。

このように選挙法改正以前の政体は独特の特徴をもっていたが、選挙プロセスは後世の批判が主張するほど、混沌としたものではなかった。選挙運動が熱気を帯びたときには告発がなされ、一部の候補者、いやそれどころか候補者全員が、賄賂や「買収」(酒の提供)の方法に訴えている、と申し立てられることもあった。しかしながら、そうしたやり方は、選挙人が何千人もいるような大きな首都の選挙区では実際には実現不可能であった。死亡したり不在だったりした選挙人のふりをして無資格者が不正な

投票をする、との非難もあった。しかし、投票者は立会人である公衆の前で、疑わしい点を吟味する地元の役人の面前に立たねばならなかったから、それは口で言うほどたやすい方法ではなかった。違法に投票したことが見つかるのは少数だったが、彼らは法に訴えられた。さらに、1784年のウェストミンスターでの選挙の後に起こったのだが、すべての選挙結果が国会の委員会によって問題視され、再検査されることもあった。しかし、重要なことに、不正行為が見つかることはほとんどなかった。上記のケースでは、フォックスの政敵がかなり詳細に検査したが、何千票もあるうちのほんの数百票しか無効にならなかった<sup>21</sup>。確かに、18世紀の投票検査で実際に選挙結果が変わることはめったになかったのである。

1700年から1832年の全期間を通して、首都で投票の規則を再検討する試みはたった1回しかなく、その試みも最終的には受け入れがたいとして国会で却下された。その1回の試みは、1802年のミドルセックスで、裕福な急進派のフランシス・バーデット卿の支持者が巧妙な戦術を用いて選挙区を広げようとしたときになされた。アイルワースに新しく設立されたグッド・インテント・ソサエティとして知られる協同組合の製粉会社が375人の株主に株を発行した。これら株主は、大半が貧しい労働者か「機械工」であった。彼らが急進派の候補者に投票をしたため、その候補者は当選した。

しかし負けた候補者から異議が申し立てられた。議会は投票検査をした結果、そうした株はフリーホールド不動産に相当しないと裁定した。そうではなく、それらは選挙を有利にするだけのために作られたものだとされた。こうしてこの戦術は、選挙人の数を増やすだけのために財産を細分することを禁止する従来の法から見て、違法であるとされた。その結果、フランシス・バーデット卿は結局、議席を剥奪された<sup>22</sup>。しかし、このエピソードは秘密裏の買収の事例ではなかったことを記しておくべきであろう。むしろそれはおそらく知恵の回りすぎる法律家が発明した公然たる戦術で、党派心があまりにも露骨だったために失敗したのである。

結局のところ、18世紀の選挙プロセスには強い政治的意思が浸透してい

## 1 プロト・デモクラシー

た。いうまでもなく、すべての個人が投票の際にあらゆる詳細な情報を完全にもっていたというわけではない。それはどんな政治システムでも、それが最も民主的なシステムであっても、いえることである。

しかしながら、18世紀の首都の有権者は選挙に深く関わりをもち、長期にわたり、多くの選挙で、高い投票率を達成していた。彼らは1770年代のジョン・ウィルクスのミドルセックスでのキャンペーン<sup>23</sup>のような議会の議席をめぐる揺れ動いた熾烈な競争選挙だけでなく、地元の役職をめぐる一連の地域レベルの日常的な選挙でも、活発に活動をしていたのである。

そうした市民の関与は幅広い社会層に共通してみられ、階級を跨った政治文化のなかで成人男性を結びつけていた。投票所では政治家と貴族（貴族院に議席のある称号をもつ貴族以外）、銀行家と金権政治家、専門職の人とパブ経営者、建築家とブローカー、それに加え、小売店主や職人、無視できない数の労働者や荷担ぎ人、奉公人が、肩をつき合わせて列に並ぶ姿がみられた。有権者でない彼らの隣人もまた投票所の群集のなかにいたのであろう。選挙権をもたない者も地域コミュニティの一員と考えられた。しかし同時にまた、そういった人々（女性や貧民）は、これらの選挙の争点となっている問題や政党のライバル関係、時にはイデオロギーといったものを解決するためには、なんの直接的な能力もなかった<sup>24</sup>。別の言い方をすれば、選挙人は自分たちの選挙区のなかでは、選挙権のない最貧層の人々より、権力を発揮する手段により近いところにいた。そして選挙人は、今日の民主主義システムと同じように、対抗する候補者のどちらを選択するかを表明する機会を定期的にもっていたのだ。したがって後世の歴史家にはその対立点がどんなに曖昧にみえようとも、選挙は投票する人にとって意味があった。

\*\*\*\*\*

ロンドンの男性参加型の政治文化を示すこうした証拠が支えになった

## 1 プロト・デモクラシー

からこそ、1832年の議会改革よりもずっと以前に、急進派の改革家がすべての成人男性に選挙権を与えるよう要求することができたのである。彼らは、エリートでない投票者たちもまた政治に対して持続的かつ意味のある利害関心をもちえるのだ、ということを目の当たりにしてきた。少数ながら大胆な先見者は、女性もまた投票権をもつべきだとさえ議論した。

このようにロンドンには改革家にとって何よりのテストケースであった。その人口や地理的な範囲が19世紀初めに飛躍的に拡大し続けるにつれ、既存の四選挙区の外側で新しく都市化した地域に住む男性は、富裕者も「中間層」も、投票からすべて除外される、という周知の不満が生じることになった。と同時に、プロト・デモクラシーの地、ロンドンは、一つの保証を提供することにもなった。戦々恐々たる伝統主義者が、1832年に提案されたような参政権の控えめな拡大でさえ社会的無秩序を引き起こす、との恐れを表明したとき、改革家たちは、その恐れとは逆に、ロンドンの既存の有権者が責任ある行動をとっていることを強調できたのである。マコーリー卿は1831年12月、それを明言した。改革に賛成の意を示す有名な演説の一つで、ロンドン選挙区は決して過激主義の粗暴な温床などではなく、「その国会議員と有権者の質は賞賛に値するものとして名高く、この長所を支持すべきだ」と語ったのだ<sup>25</sup>。

民主主義が主流になる可能性はまだなかった。イギリスの政治的伝統は寡頭的な立憲主義であり、1832年以前には、民主主義を立ち上げるほど十分には組織化されていなかった。しかし多様な参政権は、少数の大規模な「開放的」選挙区、すなわち、ノリッジやブリストル、そしてなによりも首都の中心にある議会に近い四つの選挙区—ウェストミンスター、シティ、サザーク、ミドルセックス—では、かなり民衆的な範囲にまで及ぶようになっていた。そこでは選挙人たちが、デモクラシーではないが、プロト・デモクラシー的な市民文化へ参加していたのである。

【註】

- 1 このエッセイはペネロピ・J・コーフィールド、エドモンド・グリーン、チャールズ・ハーヴェイでとりにくんでいる共同研究プロジェクトでの報告を *London Electors and Political Participation, 1700-1850: The London Electoral Database* (以下 *LED*) という題名で刊行するために編集されたものである。この研究は 2007 年 5 月 20 日に早稲田大学の都市史研究グループで報告されたが、参加者の見識、興味、周到な質問に感謝する。
- 2 選挙法改革以前の選挙システムについての最良の概論は F. O’Gorman, *Voters, Patrons and Parties: The Unreformed Electoral System of Hanoverian England, 1734-1832* (Oxford, 1989) ではあるが、そこでは首都の大選挙区よりもむしろ小選挙区に注目していることは避けられないであろう。
- 3 以下の文献にさらに多くの資料が載っている。C. Harvey, E. M. Green and P. J. Corfield, *The Westminster Historical Database: Voters, Social Structure and Electoral Behaviour* (Bristol, 1998).
- 4 最大のギャップは、1700 年から 1832 年の間にサザーク・バラで行われたものとして知られている 23 回の議会選挙と、投票総数しかわからない多くの地方選挙に関する欠落もある
- 5 ウェストミンスター選挙の結果における投票者についての資料のつながりに関しては、P. J. Corfield, C. Harvey, and E. M. Green, ‘Westminster man: Charles James Fox and his electorate, 1780-1806’, *Parliamentary History*, 20 (2001), pp. 157-85 を参照。
- 6 いくつかの例では、富裕者はひとつ以上の選挙区で投票資格があることがあるが、これは各地方選挙区の力で資格を与えたからである。選挙人は資格のある選挙区ごとに投票をする権利がある。こうした選挙権の多元性があるかどうかの範囲については、近刊書 *LED* のなかで資料のつながりによって検証されるであろう。
- 7 女性担税者は、都市自治体選挙法, 32 & 33 Victoria, c.55(1869)の下で、都市選挙での投票を認められた。30 歳以上の女性は、Representation of the People Act 7 & 8 George V, c.64 (1918)で MP 選挙権を得た。21 歳以上の女性に選挙権が拡大されたのは、Representation of the People (Equal Franchise) Act, 18 & 19 George V, c. 12 (1928)。
- 8 John Simeon, *Treatise on the Law of Elections* (1789), p. 50.
- 9 これに関する情報と次の段落に関しては、様々な資料から引き出している。近刊の *LED* の脚注を参照のこと。
- 10 これに関して、P. J. Corfield, ‘Class by name and number in eighteenth-century England’, *History*, 72 (1987), pp. 36-63; repr. in idem (ed.), *Language, History & Class* (Oxford, 1991), pp. 101-30 を参



照。

- 11 18世紀初期には公式に選挙人登録をしていない時代のため、厳密な計算はできないが、この割合はおそらくもっと小さかったであろう。
- 12 店舗税に関しては、以下の様々な文献を参考のこと。S. Dowell, *A History of Taxation and Taxes in England, from the Earliest Times to the Present Day* (1965 reprint), Vol. 2, pp. 190-1; P. Horn, 'Eighteenth-century shopkeepers and the shop tax, 1785-9', *Cake and Cockhouse*, 16/8 (2006), pp. 246-58; and I. Mitchell, 'Pitt's shop tax in the history of retailing', *Local Historian*, 14 (1981), pp. 348-51.
- 13 この内容と実投票者数の推計の証拠に関する詳細は、Harvey, Green and Corfield, *Westminster Historical Database* を参照。
- 14 この点に関しては鋭い眼識をもって粘り強く調査し続けたエドモンド・グリーンの研究の発見に対して感謝する。
- 15 色々な参考文献があるが、J.M. Simms(ed), *A Handlist of British Parliamentary Poll Books* (Leicester, 1984); J. Gibson and C. Rogers (eds), *Poll Books, c. 1696-1872: A Directory of Holdings in Great Britain* (3rd edn, Birmingham, 1994); and E.M. Green, 'New Discoveries of Poll Books', *Parliamentary History*, 24 (2005), pp. 332-67.
- 16 投票パターンは、投票者の居住地や異なる職業グループを参考にしながら分析される。というのもこの情報は投票の際に記述されるからである。しかしながら、投票者が結婚しているかどうかの情報は必要とされず、男やもめ、既婚男性、未婚男性の別は何も書かれていない。
- 17 急進派のジョン・ホーク・トゥーク (1736-1812年) は、オールド・サラム (1801-2年) 代表のMPに選出されたが、それ以前には、1790年と1796年にウェストミンスターで落選していた。しかし彼の議席は、聖職者がMPになることを禁止する1801年の立法により、在職期間を残して終了した。この禁令は、2001年に廃止されるまで制定法集に残っていた。
- 18 ムーディーは「書士」として通っていた有給の情報提供者であり、彼の書記としての技術に対して支払いがなされていたことは疑いが無い。J. A. Hone, *For the Cause of Truth: Radicalism in London, 1706-1821* (Oxford, 1982), pp. 63-5, 81-2, 101, 134, 137-8, 141, 148.
- 19 Corfield, Harvey and Green, 'Westminster man', p. 178. 最も貧しい職人の政治行動はずっと昔から分析されている。E. P. Thompson, *The Making of the English Working Class* (1963 and many later eds), *passim*.
- 20 選挙の進行についての当時の記述から、(選挙人) 記録は立会い演説会場で手に入れることが可能であり、異議が唱えられた際にはそれを調べたことがわかる。1784年のウェストミンスターで最も激しく異議が唱えられたいくつかのケースでは、確認のために自宅を訪問したことさえ

---

あった。

- <sup>21</sup> チャールズ・ジェイムズ・フォックス (1749-1806 年) はミッドハースト Midhurst (1768-80 年) とウェストミンスター (1784-1806 年) 代表の国会議員である。彼は長い間、野党にいたため、フォックス＝ノース連立内閣 (1782 年) と政党に関係なく有能者が集められた内閣 Ministry of All the Talent の時、短期間だけ役職についていた。L. G. Mitchell, *Charles James Fox* (Oxford, 1992) と *New Dictionary of National Biography* を参照。
- <sup>22</sup> フランシス・バーデット (1770-1844 年) は、1796 年にバラブリッジ Boroughbridge、1807-37 年にはウェストミンスターで、1837-44 年はサウス・ウィルトシャ代表の MP に選出された。1832 年以前に、ラディカルとして彼は 2 度政治的処分を受け投獄された。しかし 1832 年以降、彼の考え方は徐々に保守的になっていった。 *New Dictionary of National Biography* を参照のこと。
- <sup>23</sup> ジョン・ウィルクス (1725-97 年) は、1757 年と 1761 年にアイルスバリー Aylesbury で MP に選出されたが、1763 年に彼が首相に対して行った批判により議会から追放された。1768 年と 1774 年の間にミドルセックスから 4 回立候補したうち 3 回の当選は無効にされたが、1774 年の当選は反対できなかつた。 *New Dictionary of National Biography* をみよ。1774 年の結果は、候補者が有効であるかの最終的な判断を、議会ではなく選挙人が行ったことを示している。その後、テストケースとなったのは、無神論者のチャールズ・ブラッドラフ Charles Bradlaugh で、1880-85 年の間に、議席を正式に獲得するまで、ノーザンプトンで 5 回当選した。また 1960 年に相続でスタンスゲート子爵になったトニー・ベンは、継承権を放棄する権利を勝ち取り、1961 年と 1963 年のブリストル・サウスイースト選挙区での二度の補欠選挙に勝利し、庶民院に残り続けた。
- <sup>24</sup> 選挙の全内容は Corfield, Green and Harvey, *LED* (近刊) で説明されている。
- <sup>25</sup> T. B. Macaulay, *Speeches of Lord Macaulay, Corrected by Himself* (1886), p. 34.

## エッセイ 2

時代を命名する：

18 世紀の英国人は自分の時代をどのように見ていたのか

菅原 秀二／中野 忠 訳

## 時代を命名する：

### 18世紀の英国人は自分の時代をどのように見ていたのか<sup>1</sup>

自分の時代を前の時代と比較しようという考えは……基本的に  
・ 変化の時代にふさわしい考えである。

哲学者ジョン・ステュアート・ミルは 1831 年にこのように述べた。彼のこの論評は、歴史上に自分の時代を「位置づけ」ようとする際に、多くの教養ある人がもつ関心の一つのあり方をはっきり示すものであった。さらにミルは、自分の時代が「移行の時代」であるとも定義している<sup>2</sup>。彼は何が何へと変化しつつあるのかについて正確な説明をしなかったけれども、この表現が暗示しているのは、古い静態的な世界が止むことのない変化という新たな状態へと決定的に移行しつつある、ということである。

ミルの言葉はこのエッセイの出発点となる。それは当時の人々が自分の時代をどう命名したのか、その一例を提供する。またそれは、人びとがなぜ自分の時代を通時的に「位置づけ」ようとするのかという問題について、彼の考え方も示している。ここでいう通時的とは、長期にわたる歴史というものを簡潔に表す術語である。ミルの言明は、歴史家にそもそも過去における時間意識とはどのようなものなのかを探求するよう促すのである。

さらにミルの主張は、まさに彼が生きていた時代について交わされている近年の歴史家たちの論争を整理するための、一つの独特な視点をも与えてくれる。よく知られているように、1700 年頃から 1830 年、あるいは 1850 年までの「長期の 18 世紀」における英国社会の特質について、研究者の間では意見の一致は見られない。基本的な要因ですら論争の的となっていることは、歴史家の間に深刻な意見の相違があることの何よりの証拠である。「長期の 18 世紀」の始まりと終わりは一体いつなのであろうか。様々な歴史家が起点として、1660、1680、1688、1700、1714 年をあげ、

## 2 時代を命名する

他方で終点として、1780、1789、1800、1815、1830/32、1846、あるいは1851年がよいとしている。このような不確実さのために、論争は容易に解決されないまま今日に至っているのである。

### 歴史家たちの論争

大まかにいって三つの競合する解釈があり、それぞれ保守的（修正主義的）、ウィッグ主義的（漸進主義的）、革命主義的としてまとめてよかろう。もちろん歴史家たちの間の相反する論争は常に複雑である。しかも専門家というものは、様々な異なったアプローチから取り入れた諸々の要素を組み合わせる能力があり、またしばしば実際にそれを行うものである。

しかしながら、三つの「柱」となる解釈の具体例を示すものとして、いくつか鍵となる例をあげてもよかろう。J.C.D.クラークは1832年以前のイングランドにおいて変化は限定されたものでしかなかったと論じて、18世紀の状態を保守的、伝統的、農業的、国教会的、寡頭的な性格の強いものとして描いた<sup>3</sup>。彼は（例えば）都市や海外貿易や英国の植民地占有の拡大について何も言及していない。その強調点は、特にイデオロギーの面や、1832年以前にはいかなる根本的な国制の変化もなかった点に置かれている。クラークは自らの態度を保守主義者よりもむしろ修正主義者としての立場と見ることを好み、ウィッグ主義とマルクス主義の両方を修正しようとのイデオロギー的要求を前面に出している。しかもクラークは前の世代の歴史家で変化不在モデルの有名な提唱者については、驚くほどわずかしか触れていない。その歴史家とはL.B.ネーミアのことであるが<sup>4</sup>、彼はクラークとは異なり、イデオロギーを修辭的「たわごと」として軽視していた<sup>5</sup>。ネーミアにとって18世紀は明白に寡頭的な時代であったが、それは場所と地位の巧妙な操作に基づくものであり、かくして崇高な理念よりも地位に基盤が置かれていたのである。

一方、それより古く、クラークが激しく非難した見解では、（単にイングランドというより）英国は18世紀後半期に根本的に轉換を遂げた<sup>フリテン</sup>と理解されていた。この革命主義的解釈によると、18世紀の初期には英国がき

## 2 時代を命名する

わめて伝統的な国であったということは議論の余地がなかった。しかし、1780年ころからまったく異なった国になった。転換点（その正確な年代についても論争が続いているが）のあと、古典的に「産業革命」と称されている社会・経済上の変化が起こった。この見解によると、この時代には中流階級が自由貿易というエトスを奉じ始め、階級間の闘争が表面化し、労働者が抵抗をみせ始めた。革命主義的解釈を主張する最も有名なE.P.トムソンの言い回しによれば、それはイングランドの労働者階級が「自ら形成の途についた」ということを意味する<sup>6</sup>。そして、トムソンの影響下にある最近の歴史記述が強調しているのは、大西洋の向こう側の労働者や普通の船乗りや海賊といった下層階級の連帯である。彼らはポライトな社会という規範を拒否し、革命的反抗の旗を掲げていたのである<sup>7</sup>。

歴史家の中の第三番目の視点は、革命主義的解釈とも保守的解釈とも対照的なものである。このアプローチはより漸進的に解釈する傾向があり、社会的、文化的、知的変化がだんだん大きくなるのにつれて、都市、商業、産業、および植民地支配が長期的に拡大することを強調している。これはウィッグ主義的と定義されることもある解釈ではあるが、今日のその提唱者は、一般的にブリテンの特別な運命について勝ち誇った主張をするわけでも、歴史におけるミクロな変化の必然性を主張するわけでもない。18世紀初期に当てはめてみると、この漸進的解釈は保守的・修正主義的解釈や革命主義的解釈モデルの両者に対して、対照的な位置に立つことになる。漸進主義者にとって、変化の過程が始まったのは1780年代よりずっと以前であった。しかしながら、これを18世紀後期に当てはめるとき、この漸進主義的見解は革命的主義的見方により近づく。この点では、両者は共通して、静態的状态を強調する保守的解釈に対立する。こうして戦線は複雑化する。漸進主義の主張には多くの例が存在する。簡略化のため、ここでは便宜的に、ポール・ラングフォード<sup>8</sup>、フランク・オゴーマン<sup>9</sup>、ロイ・ポーター<sup>10</sup>、およびペネロピー・コーフィールド<sup>11</sup>を挙げておく。もっとも、これらの歴史家が見出す変化の性質や原因、時期に関しては、相当な見解の開きがある。

このように意見が分かれることそれ自体、時代を「命名する」ことが歴

## 2 時代を命名する

史解釈という主観的な要素の一つであることを示している。この主題を興味あるものとしているのはこの点にある。論争点のなかには、調査や議論を尽くした後で、(例えば)都市の人口規模とか、ある産業における年間生産高の規模のように、合意に達することが可能なものもあるかもしれない。もっとも、こうした問題でもいつも簡単に解決できるとは限らない。しかしながら、歴史におけるある時代全体の定義について合意を得ることは、問題の性質からしてずっとむずかしい。「時代」に出来合いのレッテルを貼ることはできないからである<sup>12</sup>。

### 方法論—同時代における時代の命名法の研究

この問題に答えるべく私のとる方法論は、過去の教養ある人びとの記録に残された意見に基づく、新たな証拠史料をできるだけ組織的に探し求めることである<sup>13</sup>。私は過去のある時点で、人びとが自分の時代について下した同時代の評価を研究する。懐古趣味的判断は排除される。確かにこうした長期的解釈、すなわち事件が起こった後に歴史を振り返ってなされる懐古的解釈も大いに興味深いものである。しかし当然のことながら、それはあと知恵の恩恵を受けたものである。もちろん後世の歴史家の評価もまたそのようなものであるのだが。

しかしながら、同時代人がその時代を命名したものは、あと知恵に影響されない生の情報を提供してくれる。そうした同時代人の評価はしばしば、「今や……の時代である」とか「……の世紀である」というような、概括的な言い回しで表明される。言うまでもなく、こうした意見は宣誓に基づく証言などではない。時代の命名は、信頼すべきもの、よくよく考えられたものであることであろうが、軽いノリで思いついたものもあるかもしれない。ほかの人が付けた時代の名前に同意しないのはお互い自由であるし、そうしたことは実際によくあった。

さらに時代を命名するという行為は、特別な嘆願の形式として使われることもある。例えば 1872 年、一団の大坂商人が銀行設立の許可を求めて新しく即位した明治天皇に請願したとき、「われわれはいま文明と啓蒙の

## 2 時代を命名する

時代に生きている」と書いた<sup>14</sup>。これは自らの案件を成就すべく考案された戦術的宣伝であり、実際、それは功を奏したのである。しかしこの言い方自体は、日本が現に文明化されているかどうか、あるいは大坂商人が個人として文明化されていると信じているかどうか、証明するものではない。それが示していることは、彼らが公然とこの見解を表明したということだけである。しかも彼らが（「特定の時代の特定の日における」）歴史の状態について彼ら流のレトリックを用いた訴えは、十分に計算された上でのことだったのである。

だが、このように複雑ではあるけれど、同時代の評言というものは、人びとの内奥の思考を明らかにするものとしてではなく、公衆の求めに応じてなされるような、外面的な表現を要約するものとして解釈することができる。そうした時代を命名する表現は、自分が生きている歴史について同時代の人びとが描く最初の草稿ともなるのである<sup>15</sup>。一つの「命名」がそれだけで「人びとが何を考えていたか」ということを証明することはありえない。それだからこそ、一つの引用を捉え、それを典型であると仮定する後世の論評家は、その証拠を信じがたいほど拡大解釈していることになる。しかしながら、たくさんの時代の命名をひとまとめにしてお互いに比較すると、公的に表明された過去の視点が、どのような範囲と分布に収まるかを洞察することができるのである。

この目的のために、私が集めたものはいまのところ、1590年から現在までの英国史につて10年ごとに引き出したおよそ750例である。それぞれの例は同時代人によるその時代についての評価であり、したがって（このデータ・ベースの目的からして）懐古的な論評は排除してある。これらの「時代の命名」はおもに日常的な調査や読書、それに加えて図書館のカタログにある本の表題を組織的に調査して発見されたものであることを触れておかねばなるまい。1700年から1830年までの時代については、総数130点あまりが数えられ、それが以下の議論の基礎にある史料となっている<sup>16</sup>。

## 18世紀の時間意識



## 2 時代を命名する

これらの証拠を精査して得られた三つの概括的結論のなかで、第一のものは最も一般的なものである。そこで認められるのは、18世紀ブリテンの読み書きができ教養ある人びとのなかに、計測される時間意識という際立った感覚が確かに存在していた、ということである。柱時計や腕時計、さらに暦を所有することが広まったのは、まさにこの時代であった。特に成長しつつある都市において、生活は日々の、あるいは年間の新しい都市的リズムに合わせて営まれていた。それは毎時・毎分と流れて行く時間についてばかりでなく、より長期の歴史の流れに関しても、時間意識を強めることになった。農村社会は「時間の外」にあったと考えるのは正しくない。そうではなく、農村社会の特徴である季節のリズムが都市における時の進行や計測される時間間隔の意識に置き換わったのである。

「もし私が時代にタイトルを付けるとすれば、群衆の世紀と呼ぶだろう」と1761年9月にホレス・ウォルポールは書いている。彼はこの表現を軽い気持ちで用いた。というのも、彼は自分の時代を命名することが好きだったし、多くの矛盾するような表現を残しているからである。しかし、この特殊な例は都市へと人びとが殺到する新しい現象について同時代人が抱いた認識として意義深いものである。この場合の都市とは、ジョージ3世の戴冠式の際のロンドンが念頭に置かれている<sup>17</sup>。ブリテンの都市化の速度が誰の目にも明らかになった後の時代にも、同様の主張をしている例がある。1843年に改革者ロバート・ヴォーンはこの種の論評を時代に合わせて更新し、群衆の所在に焦点を当てつつ、「われわれの時代はまさに大都市の時代である」と述べたのだ。

特定の時間枠で考えるということには、歴史についての何らかの専門的な理解を必要としなかった。ある「時代」というのはまったく無定形な期間である。だが、時代とは、正確な年代を必要としなくとも何か共通の性格をもつ時期なのだ、ということが暗に示されている。同様に、「・・・の世紀」というのは、かならずしも文字通り100年間を必要としない。「時代」も「世紀」も、たんなる数日よりずっと長く永遠よりずっと短い、かなりの幅をもつ時間を示している。そうした呼び方をするのは、今・ここ

## 2 時代を命名する

の現在を歴史の舞台上に位置づけようとするところにあるのだ。18世紀にこのような言い方をした人は、一般的に古典教育を受けていた。古い歴史の循環史観は、「黄金時代」から前の「銅の時代」や「鉄の時代」を経て再び「黄金時代」に回帰する、というような概念を展開していたのである。

そのような用語法を時代にあわせて焼き直すというやり方は、人びとが自らの生きている時代についての考えを表現する手っ取り早い方法だった。それには基本的な識字能力とわずかな想像力があれば十分だった。年齢や性別に関わりなく、評論家、歴史家、劇作家、小説家は「時代を命名する」好例をたくさん提供してくれる人たちである。もう一つの集団は聖職者で、彼らは説教のなかで自分の時代を特徴付けようとする傾向がある。とりわけ「時代」をお手軽に要約する傾向をもつ職業人は、今も昔もジャーナリストである。

長期的に見ると、時代を同定する最も普通の形式は、最新技術、および／または身近に利用できるある消費財に言及することである。20世紀の例のなかから少しだけ挙げてみれば、「テレビの時代」（1958年）、「コンピューターの時代」（1965年）、「携帯電話の時代」（1995年）といったものがそうである。ちなみに、この引用した年代は新技術の発明の年ではなく、その広範な普及が意識されるようになった年であることに留意しなければならない。

しかしながら、18世紀には、一般に普及した消費財によって「時代を命名しよう」とするスタイルは、後の時代ほど頻繁に用いられたわけではなかった。だがその例はある。「従者付の馬車の時代」とはいつのことであろうか。これはある同時代の作家による表現であり、彼はきれいに手入れされた馬によって引かれた、最新流行の様式の洒落た馬車と伴走するお仕着せを着た従者に感銘を受けたのであった。答えは1736年である。「広告の時代」とはいつのことであろうか。私の学生に聞くと、彼らはたいてい20世紀だろうと答える。だがこの表現は1785年にさかのぼるもので、この頃から宣伝を満載した新聞はあたりまえのものとなったのである。

時代を要約する見解の多くは消費と流通に焦点を合わせたものであった。しかし新しい生産の技術もまた変化しつつある時代の論評の素材とな

## 2 時代を命名する

っていた。こうして 1829 年、ジョン・ステュアート・ミルがこの議論に加わってきたまさにそのときに、トマス・カーライルは、当時の時代の命名のなかで最も有名なものの一つを著わした。彼は『時代の兆候』のなかで、「もしわれわれが一つの形容辞でこの時代を特徴づけるように命じられたとしたら、英雄、信仰、哲学、道德の時代ではなく、何よりも機械の時代と呼びたくなるはずである」と書いたのであった<sup>18</sup>。

### 18 世紀の変化の是認

これら多くの多様な例から、歴史的に注目すべき第二の論点が浮かび上がってくる。18 世紀の論評家の多くは変化の感覚に注目していたばかりではなく、それを是認することも公言していた。

「奢侈 (luxury)」は多くの意味をもつ厄介な語句である。それは後述するように、批判的な意味を込めて使われることがありうる。しかし、それはまたほとんど経済成長や消費社会の出現を暗示する語句としても使われていた。こうして「娯楽と奢侈の時代；ヴォクソールとラネラの時代」は、変化の過程を好ましいとする表現となった。ロンドンの新しい都市遊園地はこの時代の典型として受け取られていたのである<sup>19</sup>。「高度に洗練された絢爛たる時代」(1767 年)、「洗練と奢侈の時代」(1778 年)のような要約や「この時代の奢侈的濫費」(1784 年)についての言及も同様に、変化を好ましいとする表現であった。これらはより単純であった前の時代と新しい豊かさを暗黙のうちに対比させつつ、経済的変化の過程容認する評価であった。

付言すれば、(自明のことながら)すべての引用は原典の文脈のなかで点検されなければならない、ということを強調する必要がある。したがって、1795 年に過激な演説家で政治運動家であるジョン・セルウォルが「この奢侈と浪費の時代」について書いたとき、彼の意図はこの時代を賞賛することではなく、非難することにあつたのである。にもかかわらず、彼もまた経済の拡大、富、さらに彼にとっては容認しがたい社会的軽薄さに基づいた変化の過程をしぶしぶ受け入れていた。

## 2 時代を命名する

しかしながら、18世紀における多くのイギリスの論評家のあいだには楽観的な雰囲気広がっていた。たんなる変化ではなく、「よりよい方向への変化」を認める声がますます高まってきたのである。このような論評家はとりわけ学問と知識の広まりを強調していた。彼らにとって、同時代の歴史は楽道家のために存在するものであった。建築家ジェームズ・ステュアートは1771年に懇懇な言い回しで、「古い誤謬を正し、新しく改善するという精神が一般に広まっている」と書いた。他の者もこれに同意した。「最も偉大な光と知識の時代」(1746年)、「光と寛大の時代」(1782年)、「科学と哲学の時代」(1794年)、さらには「理性と科学の進歩的な時代」(1796年)というわけである。これら公然たる意見表明はほとんどが男性によってなされたが、最後に挙げた論評は、この合唱にまさに加わろうとしていた匿名の女性のペンから生まれたものである。

賞賛を暗示する主要な語句には、啓蒙、科学、理性、改善といったものがある。そして、19世紀にずっと広く使われるようになり、典型的な流行語となるキャッチフレーズは進歩である。すべての語句はきわめて肯定的なものである。「啓蒙」という語句を使用したもう一つの例に、トム・ペインの理神論的冊子『理性の時代』(1795年)がある。彼の場合、啓示宗教についての懐疑を公然と表明することで共感者を得ることはほとんどなかった。しかし、ペインの言葉の使い方が示しているのは、哲学的議論に新鮮な衝撃を与えるために、いかにありきたりの決まり文句が借りてこられたか、ということである。また、彼の本に陳腐な表題を付することによって、この議論のもたらす破壊的帰結が悟られる前に、彼は若干の読者を獲得することができたのである。

これらすべての肯定的で楽観的な記述は、変化の意識を、さらにはその変化がよりよい方向に向かうとの確信を表現したものであった。加えて、このような論評はしばしばイギリスの現状についても適用された。ここですべての例を挙げる余裕はないが、現状の改善を信じ力説した一つの主張を挙げておく。それはよく知られた硬派の雑誌である『ジェントルマン・マガジン』誌に報じられたものであり、誇張的表現に満ちているにもかかわらず、大真面目に次のように言っている。「もし30年前にイングランド

## 2 時代を命名する

をくまなく旅行した人が、いま改めて同じことをしたなら、自分が魔法の国にいると気づくであろう。イングランドはもはやボルネオやマダガスカル以上に過去のイングランドと似ても似つかないものとなっている。」

今日の人びとがこの論評はいつ書かれたと思うかと聞かれると、たいていの者は 19 世紀半ばの年代を答える。実際には、これはその百年前、すなわち 1754 年に書かれた。だから、18 世紀の観察者の少なくとも何人かは、変化を敏感に意識していたのだ。別の観察者は 1754 年に、女性の衣服や姿から彼女が使用人なのか料理人なのか一家の主人であるのかわからないので、男性は当惑している、とまで語っている<sup>20</sup>。変化の過程はたんに抽象的なものではなく、イギリスの街角のそこかしこで見ることができるものだったのである。

### 変化についての不安

しかし異なった見解を取った者はどんな人なのか。ここに私の「時代を命名する」コレクションから引き出される第三の結論がある。たしかに楽観的な見解に反対する多くの論評家があった。しかしながら、彼らが反対したのは変化そのものについてではなく、その意味についてであった。言いかえれば、もう一つの見解は歴史の動向についての悲観的な見方である。それはより悪い方向への変化を主張し、より良い方向への変化の見方に異を唱えたのである。

これらの批評家たちは物質的改善が生じたことには同意したが、それは解放ではなく退廃をもたらすものであると警告した。この見解を表明した有名なものの一つが 1757 年に現れた。ジョン・ブラウンの『この時代の習慣や道義に対する評価』は、ルソーさながらに奢侈とその有害な効果を非難した。この冊子が熱心に主張したのは、英国が長期の歴史循環を通過しつつあるということであった。「野蛮で単純な段階から教養があり洗練されたものへ、(やがて) 柔弱で退廃的で自堕落な段階を経て」、最後に「衰退と滅亡」に至る段階を継起的に通過する、というのである。ジョン・ブラウンにとって、この国はすでに退廃と放蕩の段階に到達していた。こう

## 2 時代を命名する

して読者は疑いもなく衰退と滅亡に近いものと感じさせられることになった。同様な嘆きの叫びは 1736 年の冊子『奢侈：高慢と虚栄—英国という国家の破滅』に聞かれるし、1778 年のもう一つの冊子は「英国は・・・破滅へと沈みつつある」と直截に主張していた。

悲観的な言葉が連発されるタイミングは、しばしば軍事的な災難がきっかけとなった。だから七年戦争（1756—63 年）の初期段階では、ジョン・ブラウンのような警告が数多く現れたが、1759 年の一連の勝利とともに、最も断固たる悲観主義者をのぞけば、そんな警告は姿を消した。またアメリカ独立戦争における英国の敗北の予想は、1770 年代後期から 1780 年代初期に不満の渦を生むきっかけとなり、過度の奢侈は柔弱さを生み、その結果、軍事的無能力を作り出すのだと論じられた。

こうした不満を語る様式があまりに流行していたので、自由主義的貴族であったミラボーが 1784 年にフランスから英国を訪れたとき、この国の切迫した「没落」について書いた本はすべての図書館を一杯にするくらいある、と冗談をとばした。だが、彼自身は英国の豊かさと強い国力に感銘を受けていたのである<sup>21</sup>。

しかしながら、破滅の叫びのなかで最も切迫したものは、道徳的批判の力であった。この観点もまた変化が起こっていることは認めるけれど、その影響は特に宗教の遵奉に有害であると警告していた。ある風刺詩は 1727 年に、「さて、われわれはついに危殆に瀕する事態に至ったようだ」「現在の悪徳の時代は過去を曇らせる」と述べている。こう語られたのが平穏な年だったことからすると、これは意外な論評である。この年はジョージ 1 世からジョージ 2 世へ王位が移行したが、面倒なことは何も起こらなかった。しかしこの論評は変化に対する深刻な疑念の種が存在していたことを示している。聖職者は変化を批判する者たちのなかでも目立つ存在であった。人びとがあまりにも世俗的な心をもつようになることを恐れて、彼らは冊子や説教を通じて気まぐれな会衆を救うよう努めた。最も普通の不平の表明は、「現在は背信の時代である」というものであった。それは性的背信行為ではなく宗教的信仰心の喪失を意味していた。いろいろな著者が 1800、1796、1795、1783、1765、1757、1736、1729、1695、1676 年

にも同じような主張を繰り返している。もともと、この一覧は網羅的なものではない。1798年には、ある聖職者が聴衆の同意を求めつつ「姦通、賭博、安息日遵守違反、教会礼拝式軽視……宗教についての無関心……が以前のどの時代にも見られないほど広まっていないであろうか」と不満の声を上げていた。そして彼は陰うつな調子で、悪徳の風潮がまもなく「この世界のこの地域にあるキリスト教信仰を根絶する」ことになるだろう、と付け加えたのだった。

実際にはもちろん、当時でも後の時代にも、英国の基本となる宗教は消えうせたわけではない。多くの激しい不平不満は聖職者の職業上のレトリックの一部であり、会衆にショックを与えて悔い改めさせようとするものであった。それゆえに、極端な悲観主義も極端な楽観主義も文字通りに受け取られるべきではないのである。

とはいえ注目すべきなのは、18世紀には不平文学とでもいうべきものが存在していたということである。同様に、明らかなのは、この不平文学は変化の現実を実際には受け入れていたが、それを正反対の視点から見ていたということである。この種の著作はすべて、俗物的で世俗的な社会とともに富裕な消費経済が到来し、そのなかでは宗教の公的役割も変化しつつあることを暗示していた。確かに聖職者の批判は、自分たちが道德の風潮をひっくり返すことができるものといまだに期待していた。彼らの悲観主義は諦念にまで至っていなかった。彼らの非難の激しさは別のことを示していた。とはいえ、彼らはかならずしも最善の策を取ったわけではなかった。それゆえに、かの皮肉家の国教会の知者スウィフト首席司祭は1721年に仲間の聖職者に対して、たいていの不信仰者は説教を聞きに教会に出席することはないのだから、不信心者を攻撃する敬虔な説教をしても空振りに終わる、と注意を喚起せねばならなかったのである<sup>22</sup>。しかしながら、彼の忠告はあまり注意を引くことはなかった。罪と悪徳が増大する風潮に対する聖職者の嘆きは、特に国教会において、説教のスタイルとして根強く残ったのだった。

## 結論

このサーヴェイからわかる全般的結論のなかで第一の最も明確なものは、同時代の「時代を命名する」証拠からは変化を認めない事例は得られない、ということである。すべてのことが同じ状態にある、と主張している証人はいない。確かに「ここでは何も起こらない」と不平を述べている書簡作家も存在する。しかしそのような場合には、つねに強調点は「ここでは」というところに置かれていた。ここ、とは通常どこか人里離れた場所や片田舎であり、別の場所—通常は都市—では心躍るようなことが起こっていることを疑いもなく暗示する表現であった。

歴史家は同時代人が残した意見を、特に当時の人のあいだでも異論があるような場合には、そのまま受け入れる義務はない。しかしながら、18世紀の教養ある論評家たちは、ごく控えめに言っても非常に大きな示唆を与える資料上の根拠を提供してくれる。確かにすべてのことが変わったわけではない。J.C.D.クラークは、例えば1689年から1832年の間に大規模な憲制上の刷新がなかったというような、連続的要因に特に焦点を当てている。他方で彼は、修正主義の議論をあまりに遠くまで進める。18世紀には誰もイングランドが「信教国家」と主張していなかったし、特に国教会の聖職者が声高に主張していたのは、当時「信仰の時代」ではなく「背信の時代」とあるということであった。この18世紀からの同時代証言は特に重要な意味をもっている。というのも、クラークは仲間の歴史家たちに、過去について時代錯誤な判断を下さず、過去それ自体の証言に注意を払うべきである、とよく警告していたからである。

これまで見てきた時代を要約する評価のなかで確認されるのは、18世紀は漸進的な変化の時代であったということが明らかに受け入れられていた点である。これは革新の証拠に喜びを見出す楽天主義者も、変動が孕むものに不安を抱く悲観主義者も認めていることであった。

さらに同時代人が認めた変化の多くは、それを是認しようと非難しようと、同じものであった。「奢侈」は時代を表すごく普通の特徴の一つであった。その他には、社会的、文化的、知的変化をともなう商業、都市、経



## 2 時代を命名する

済の成長があった。これらのどれか一つもまた、絶対的な証拠となるわけではない。例えば、「啓蒙」の新世界が目前にあるという主張には、修辭的樂觀主義がふんだんに認められるし、同様にキリスト教信仰が根絶されようとしているという主張にも、誇張された悲嘆があった。しかしながら、どちらの解釈にも変化についての一連の期待が潜んでいた。また、変革が起こる正確な日時についてはっきりしたことがわからないというのも、漸進的な適応過程に対する対応にまさに特徴的なものだ、とうことも触れておくべきかもしれない。漸進的な変化は定義からして、政治革命のような激動よりも見分けることがずっとむずかしいものなのだ。

「時代を命名すること」がしばしば通俗劇めいたジャーナリスティックなものに流れる傾向があることは確かである。だから困難な時期には、レトリックは性急で過熱したものとなった。それでも、道徳や国家の崩壊についての差し迫った警告は、本心からなされていると信ずる十分な理由は存在する。

しかしながら、全体としてみれば、これらの発言の最終的メッセージは、この時代の間英国の経済的・軍事的成功によって補強されて、樂觀的な見解が定着し始めていた、ということであった。個々人をとってみれば、樂觀主義から悲觀主義へ、またそこから樂觀主義へ戻るといのように切り替わることもありえたし、実際にそうという個人もいた。「時代を命名する」ことは雰囲気左右される即興的対応といったものになりがちだったから、それは十分ありうることである。しかし全体として、18世紀を通じて漸進的に進んだ現実の変化に支持されて、恩恵をもたらす深い変化という支配的な神話が作り上げられていった。強気な見方を促すのに、軍事的成功や植民地の拡大のようなものはかならずしも必要なかったのである。

「改良」は18世紀において、ウィッグ主義的確信を表す常套句となり、それはしだいに「進歩」への19世紀的信仰へと変容していくことになった。この信念はやがて、しだいに多くの人を受け入れるようになった直線的移行という言説に取り込まれていった。それはあたかも、歴史が太陽で照らされた高地に向かってゆっくりと斜面を登っていくかのような過程

## 2 時代を命名する

だった。

こうして 18 世紀における漸進的変化の事実は歴史家に受け入れられるものとなったが、それは英国の特殊な栄光の歴史としてでも、不可避免的で普遍的な過程としてでもまったくなく、17 世紀後半から生起してきた多くの現実のミクロな変化に対する同時代人の認識を表すものとして受け入れられたのである。この見解は完全な静態状態や完全な大変動よりもっともらしいものである。しかしそれはまた、広範囲のミクロな変化は長期的には累積的な衝撃力をもつ傾向がある、という事実を考慮に入れている。実際、18 世紀がまさに終わろうとしているときに、少数の観察者は技術革新のペースが加速していると報告している。こうして織物生産の一部から他部門への技術移転を見て、アーサー・ヤングは 1788 年に鋭く「ある革命が生じている」と書いたのである。すでに「生じた」ではなく、「生じている」と。

英国の変化しつつある世界は結果として大転換の先触れとなった。だが、それはまた変化を包み込み順応させる一つの解釈としての漸進的「進歩」に対する国民的信仰を生み出した。そのようなわけで、ジョン・ステューアート・ミルが「現在は移行の時代である」と書いたとき、それがいかに使い古された表現であっても、彼はこの時代の主流となる見解に立っていたと言えるのである。

---

【註】

- 1 2007年5月の日本への研究訪問の際に、北海道大学、専修大学、東北大学、早稲田大学で開催されたセミナーの聴衆に心から感謝する。彼らは洞察力に富む質問と楽しい議論を提供してくれた。
- 2 J. S. Mill, *The Spirit of the Age*, ed. F. A. Von Hayek (Chicago, 1942), p.1.
- 3 J. C. D. Clark, *English Society 1688-1832: Ideology, Social Structure and Political Practice during the Ancien Regime* (first edn. 1985).
- 4 L. B. Namier, *The Structure of Politics at the Accession of George III* (1929; reissued 1957). この本の分析として、ネーミア自身の核となる年代は1750年代であるが、ネーミア学派の学徒は彼の解釈を18世紀全体に適用しようとする傾向があった。
- 5 これに関しては、L. Colley, *Namier* (1989) を見よ。
- 6 E.P.トムソンの影響力のある著作、*The Making of the English Working Class* は1963年に初版が出版され、現在でも出版され続けている（市橋秀夫・芳賀健一訳『イングランド労働者階級の形成』青弓社、2003年）。完全な文は次のとおりである。「労働者階級はある指定されたときに、太陽のように勃興したのではなかった。それは現在、それ自身、形成されつつあった。」(Preface, 1968 edn., p.8).
- 7 P. Linebaugh and M. Rediker, *The Many-Headed Hydra: Sailors, Slaves, Commoners and the Hidden History of the Revolutionary Atlantic* (Boston, 2000).
- 8 P. Langford, *A Polite and Commercial People: England 1727-83* (1989); and idem, *Public Life and the Propertied Englishman, 1689-1798* (1991).
- 9 F. O'Gorman, *The Long Eighteenth Century: British Political and Social History, 1688-1832* (1997).
- 10 R. Porter, *Enlightenment: Britain and the Making of the Modern*

---

*World* (2000) (見市雅俊訳『啓蒙主義』岩波書店、2004年)。

- <sup>11</sup> P. J. Corfield, *The Impact of English Towns, 1700-1800* (1972) (坂巻清・松塚俊三訳『イギリス都市の衝撃—1700-1800年』三嶺書房、1989年) ; and idem, 'Class and Number in Eighteenth-Century England', *History*, 72 (1987), pp.38-61; also repr. in idem(ed.), *Language, History & Class* (Oxford, 1991), pp.101-30.
- <sup>12</sup> 例えば私のクラスで、「近代はいつ始まるのか」というような質問をするとき、答えは一致しないことに確信をもっていたが、実際に決して一致するものではない。もう一つの「ブリテンはいつ近代となったのか」という質問に対しても、1536年(宗教改革)から1649年(チャールズ1世の処刑)、1689年(名誉革命)、1780年(産業革命)、1832年(第1次選挙法改正法)、1928年(女性への完全な選挙権)、1945年(アトリー労働党内閣)まで多様な回答が引き出される。サッチャー政権後期のあるとき、ある辛らつな学生はブリテンの近代性についての質問に対してそっけなく「まだ」と答えた。それは愉快的ひと時であった。しかしながら、私は教育の機会を逃してしまった。私は次のように尋ねるべきだったのだ。「もしブリテンがまだ近代になっていないとしたら、いまは何か。まだ中世なのか。それとも新封建時代なのか。あるいはまだ他の何らかの時代なのか」と。
- <sup>13</sup> 人びとの意見を描く際の手引きとなりうるもののなかには、「古き良き時代」や「古き悪しき時代」についての唄やことわざから収集されたものがある。しかしながら、この材料は正確な日付をつけることが特にむずかしい。なぜならば、(例えば)唄の歌詞はしばしば語句の意味に周到な注意を払わずに繰り返されるからである。それゆえに、唄の歴史はこの記述から排除される。これはもう一つのより長い論文の主題となるかもしれない。
- <sup>14</sup> J. Hirschmeier, *The Origins of Entrepreneurship in Meiji Japan* (Cambridge Mass., 1964) (土屋喬雄/由井常彦訳『日本における企業家精神の生成』東洋経済新報社、1965年), p.37 に引用されてい

---

る。

- 15 時代を命名することに関するより完全な議論については、P. J. Corfield, *Time and the Shape of History* (2007), pp.150-7 を見よ。
- 16 この材料に関する史料を付された完全な論文は、長い論文として現在、刊行の準備をしているところである。ここはこの主題の要約である。
- 17 この引用は私が特に好きなものである。というのも、これは私の収集物の最初のものであり、私に比較としての例や矛盾した例を探すきっかけを与えてくれたものだからである。
- 18 T. Carlyle, 'Signs of the Times', *Edinburgh Review*, Vol.98 (1829), reprinted in idem, *The Collected Works of Thomas Carlyle in Sixteen Volumes* (1857-8), Vol.3, p.100.
- 19 これに関しては、P. J. Corfield, *Vauxhall and the Invention of the Urban Pleasure Gardens* (History & Social Publications, 2007), passim を見よ。
- 20 'Civis', 'The Prevalence and Bad Effects of Luxury', in *The Gazetteer*, 5 Sept. 1754, repr. in the *London Magazine and Monthly Chronicle* (1754), Vol.22, p.458.
- 21 [H. G. Riquetti], *Mirabeau's Letters during his Residence in England, with Anecdotes, Maxims, Etc ...* (1832), Vol.2, pp.162, 140.
- 22 Anon.[J. Swift], *A Letter to a Young Gentleman, Lately Entere'd into Holy Orders* (1721), p.25.

【時代を命名する：主要参考文献】

時代区分全般

## 2 時代を命名する

---

P. J. Corfield, *Time and the Shape of History* (2007)

「時代の名前」という章を含んでいる。

T. K. Rabb, 'Narrative, Periodization and the Study of History',  
*Historically speaking: Bulletin of the Historical Society* [Boston  
University], Vol.8 (2007).

## 18世紀を解釈する

[例となるテキストは膨大な数から抜粋されたものである]

### 保守的解釈/「修正主義」

J. C. D. Clark, *English Society 1688-1832: Social Structure and  
Practical Practice during the Ancien Regime* (first edn. 1985).

L. B. Namier, *The Structure of Politics at the Accession of George III*  
(1929; 1957).

### 漸進主義者の解釈

P. J. Corfield, *The Impact of English Towns, 1700-1800* (1982) (坂巻  
清・松塚俊三訳『イギリス都市の衝撃—1700-1800年』三嶺書房、  
1989年)。

P. Langford, *A Polite and Commercial People: England 1727-83*  
(1989)

F. O'Gorman, *The Long Eighteenth Century: British Political and  
Social History, 1688-1832* (1997).

R. Porter, *Enlightenment: Britain and the Making of the Modern  
World* (2000).

### 革命主義的解釈

P. Linebaugh and M. Rediker, *The Many-Headed Hydra: Sailors,  
Slaves, Commoners and the Hidden History of the Revolutionary*

---

*Atlantic* (Boston, 2000).

E. P. Thompson, *The Making of the English Working Class* (1963; + many later editions) (市橋秀夫・芳賀健一訳『イングランド労働者階級の形成』青弓社、2003年) .

エッセイ 3

歴史家と大きな歴史像への回帰

道重 一郎／唐澤 達之 訳



## 歴史家と大きな歴史像への回帰<sup>1</sup>

「時間と空間以上に私を悩ますものはない」1810年1月、随筆家のチャールズ・ラムはこのように書き、さらに「しかし、私はこうしたものについて考えないので、それほど悩まなくてすむ」とあまり深刻にならず続けている<sup>2</sup>。人間は一般的に時間と空間を当然のものとしており、ほとんど気にもしていないので、ラムの自己分析は、少なくともその前提の後半については承認されるであろう。これらの要素はわれわれが生きている広い宇宙の単なる「所与の」条件である。結果として時間と空間は組み合わせパズルを作り出す。私を含む何人かの人びとは「時-空」と呼ぶことを好んでいるのだが、アインシュタイン以来、この「空-時」（この語句は実際にはミンコフスキーが編み出していた）について語ることに慣れてきている<sup>3</sup>。

物理学者は時間（ $T = ?$ ）の性格を規定する単純な公式をもっていない。そして懐疑的な哲学者のなかには時間の存在そのものを議論の対象としているものもある。したがって一致した見解も共有された接近方法も存在していない。こうした事態を反映して、歴史家のデヴィッド・ランデスは、かつて見当違いの憤激をぶつけながら次のように述べた。「我々はほんのわずかなアト秒（ $10^{-18}$  秒）という時間までどうやったら計ることができるかを確かに知っている」、しかし「時間とは何かについては誰も知らない。<sup>4</sup>」

身近にあるようでいて、そうでない。知っているようで知らない。理解しているようでいて理解していない。かなり気楽に子供たちへ時間について教えることはできるが、語る内容をはっきり示すことはできない。このように時間を明確に定義づけできないのだから、長い時間に大きな関心を向けないとしても、特に弁解する必要はない。これに対し、時間より空間は知的な領域で正面から取り扱われてきたように見える。文化人類学や言

語学において、例えば「構造主義」—つまり空間化—は物事がいかに作用するかを発見するために、ある特定の時点における共時的なネットワークを検討しようとした<sup>5</sup>。

歴史家も豊富で綿密な研究を通じて参加してきた。単純な公式を作り出すことも可能である。つまり、時間を通じた歴史=これまで起こったことの総計、といった公式である。しかしこれは理解を深めるのに資することのない循環論である。一般的に歴史家は時間に関して哲学的に考えることをめったにせず、非常に長い期間を対象とした歴史研究は知的に時代遅れのものになってしまっている。

この傾向が生じる一つ一つの主要な理由は、疑いもなく明らかに実務的なものである。研究が量的に増加するにしたがって、研究分野としての歴史学はばらばらの専門領域に細分化されてしまった。<sup>ブリテン</sup>英国だけでも 2000 人以上の歴史学の専門家がいる。その数は世界全体で見れば 10 万人をはるかに上回るに違いない。これらすべての研究に余念のない学者たちのすべての業績を追いかけることのできる者などいないのだから、専門家がとる対処法は特定の時代および/または特定のテーマに専門化することである。さらに歴史学の細分化は研究、教育、評価などすべてのレベルで分かちがたく組み入れられている。歴史を専攻する学生たちは、研究指導にあたる教員たちの専門分野から自分の専門を選ぶように求められるのが一般的であり、学者は学者で同じようなあるいは密接に関連した専門分野を学ぶ人たちと語ることになる。

循環的であるか、直線的であるか、静態的であるか、革命的であるか、あるいは複層化しているかはともかく、歴史家がどのような歴史の長期的枠組みがありうるかを議論するよう求められることはごくまれである。例えば都市史を専門とする歴史家が都市の非常に長期の歴史を議論することはめったにない。ルイス・マンフォードの『都市の文化』(1938 年)は、背景説明として読書リストにおそらく残っているだろう。しかし今日マンフォードを読んでいる人が果たしてどれだけいるだろうか。私の経験では、きわめてわずかである。都市をその時代の社会的・経済的・文化的文脈のなかで位置づけようという彼の追究は、特別に注目する必要のあるもので

はもはやないし、混沌とした工業都市という彼の図式的な見方は単純すぎる。以来長い間に研究は進展し、著しく深められた、だが広がりには失われつつある。

けれども、専門化は、歴史家が通時的なものを無視してきたことの根本的原因というよりは、一つの兆候に過ぎない。人文科学の他の多くの領域の研究についても同様のことが観察されるだろう。特定の事柄に深く没入することが教え込まれる一方で、期間の長い研究をおこなうコースは（例えば）文学的な研究において流行遅れである。

こうしたことを述べるのは、研究上の知識の豊富さと深さについて学者たちを非難したいからではない。反対に、現在は歴史家にとってわくわくするような時代である——なぜなら、現在とても多くの未開拓のテーマ、（例えば）ジェンダー史や（ますます広がりを見せしつつある）環境史や動物史といった多くのテーマがあることについて、以前よりはるかに多く知るようになっているからである。しかし、これと平行して挑戦すべきことは、我々が十分に行なっている深く掘り下げた研究を捨て去ることではなく、新しくより良い大きな見取り図を作り出し、討議を重ねることによって、我々の洞察の蓄積をさらに増すことである。

ポストモダニスト理論が崩壊しつつある現在こそ、この冒険的企てにとって最適のタイミングである。1980年代と90年代の西欧でかなり流行したポストモダニストの考えでは、時間それ自体がばらばらにされ、もしくは断裂され、その結果、時間のなかにある歴史は脱秩序化され、ランダムなものになる、とされる<sup>6</sup>。しかし、完全にばらばらにされた時間というモデルは維持されえない。物事は——続きの演説のように——時間を通じて起こる。原因と結果が作用する。多くの学問領域で現在、「時間論的転回」が存在している。歴史家たちは一般的に言えばポストモダニズムの反歴史的動きを拒絶しているが、彼らもまたこの新しい知的な潮流の一部となるべきである。長期的な展望は歴史的研究の根底をなすものであるのだから<sup>7</sup>。

## I 大きな見取り図の研究

もとより「大きな見取り図」としての歴史がけっして消え去っているわけではないことは認めねばならない。したがって、この第1節では過去と現在にわたるこうした著作の状況を検討する。

最近では、思考を刺激する環境史の新しい成果が存在する。ニール・ロバートの『完新世』(1998)のような大きな研究は、紀元前10000年前から現在に至る自然界と人間との関係の変化について検討している<sup>8</sup>。この本はきわめて論争的な歴史書で、人類すべてが地球の温暖化の意味に関する科学者の分析を無視して、われわれ全体を危機にさらしていると警告している。しかしこうした地球的なスケールの研究は現在の歴史教育カリキュラムにのっているだろうか。まったくのっていない。

今一つの「大掃除」の例はフランシス・フクヤマから得られる。歴史家としてではなく、訓練された政治学者として、合衆国の外交政策に関する顧問としての有利な地位から、彼は『歴史の終わり』(1992)と題された世界のパノラマを描いた<sup>9</sup>。彼にとって、アメリカ的なスタイルの自由民主主義が地球規模で前進することは不可避であった。この大胆な予想は多くの注目を引き、ことに差し迫った世界の終焉を予言しているように見えた。実際には、フクヤマにとっての「終わり」は歴史の「終幕」を意味するのではなく、樅の木がどんぐりにとって進化の到達点であるのとまったく同じように、歴史における進化の到達点なのである。ともかく、メディアは一時的にもてはやしたが、その熱狂もたちまち過ぎ去った。今日、フクヤマを最近誰か読んだかとたずねたときに、肯定的な返事をする歴史家はごくわずかである。この研究はメタ・ヒストリーの科目に含まれるだろうか。否、そうした科目自体がまれだからである。

おそらくアーノルド・トインビーの訓戒に満ちた物語は、「大きな見取り図」についての警戒心を募らせる役割を果たしてきた。1934年から1961年までの長い年月をかけて、彼は12巻におよぶ大部の『歴史の研究』(1931-61)を刊行した。これは、民族や国民国家の興亡ではなく、世界の「諸文明」の蓄積が増大したり減少したりする有様を年代記的に叙述した、叙事詩的な企画であった。確かに彼は21(後に31に拡大したが)の文明を、

8つの「発育不全の」もしくは「成長を阻まれた」文明とともに確認し、また少なくとも650の「原始的」社会を確認した。これら諸文明の対照的な運命は、度重なる挑戦とそれへの応戦、そして今一度の挑戦として描かれた。

トインビーは最初、歴史家としてばかりでなく、影響力のある歴史哲学者としても喝采を浴びた。彼はまたその時代の学問的な傾向にも敏感であった。例えば、1970年に『爆発する都市』を著わした<sup>10</sup>。マンフォードが早くからトインビーを引用していたのとまさに同様に、この著作はマンフォード流の整理をしている。そしてトインビーは人間生態学に関する先駆者的な研究であるマンフォードの都市史を継承した<sup>11</sup>。しかし、トインビーを学問的に論評した人たちには訴えるものがなかった。トインビーの行なった諸文明の分類もその全体的な説明も、どちらも批判の対象となった。ある批評家は特に酷評し、トインビーは多弁な山師であると非難した。それどころかこの批評家は、トインビーが「お気に入りのギリシア語でむしろ」短い詩を書くべきであった、と冷笑した<sup>12</sup>。このような攻撃にさらされて、かつては高かったトインビーの評判は急速に失墜した。以来、彼をあえて模倣するものはほとんどいない。確かに世界史は書かれているが、世界の理論を創り出そうとするものはほとんどない。今日トインビーを読んだものがあるだろうか。要約版ですら読んでいるだろうか。読んでいる人はほんのわずかしかないし、ましてや今日でも彼を歴史哲学者であると主張するものとなると、さらに少ない<sup>13</sup>。

しかしながら、共時的なことに熱中する——つまり特定の時点の特定の出来事やテーマを深く研究する——方を選んで「大きな物語」から逃れるという傾向は、19世紀から継承した、二つの大きな世界を描く英雄物語的歴史もしくはメタ・ナラティブが、20世紀に崩壊したことによっていっそう早められた。

その一つは、野蛮から文明への直線的な「進歩」を信頼する信念である。この見方はとりわけ西欧で広く見られるのだが、世界戦争、独裁、飢饉、致命的な疫病、そして大量虐殺の証拠に直面した20世紀という時代のなかで衰退した。今日誰が普遍的で止まることのない進歩を信じるだろうか。

驚くべきことになお信じている者もいるにはいるが、けっして多数ではない。反対に若い人びとは不安を抱き、止まることのない衰退を恐れていることに時として気づかされることがある。

もう一つの大きなメタ-ナラティブは、階級闘争を原動力とし、革命によって歴史的発展段階が継起するという、マルクス主義的な発展段階論である。この考えでは、平等主義的な共産主義が、そして最終的には国家の「廃絶」が予定されていた。しかしこのモデルもまた、事実によって拒否され、歴史の片隅に追いやられた。今日誰が共産主義の不可避的勝利を信じるだろうか。ほんのわずかな頑固なマルクス主義者が、労働者の理想郷を作り上げようとした過去の試みを誤った共産主義あるいはスターリン的国家資本主義と規定して、なお信じているに過ぎない。だがこの歴史の修正版ですら、歴史の諸段階がマルクスとエンゲルスが最初に明らかにしたほど直線的に進むわけではない、という認識を伴っていた。この点については、さらに後に述べる。

実際、人類すべてにとって共通の歴史を叙述することは、概念の上でも組織の面でも、困難を伴うことは明らかである。そしてこうした困難は、過去の傾向を未来に向けて投影し始めたとき、いっそう深刻となる。  
物語的な歴史ナラティブに対しては大きな大衆的な欲求がなお存在する。国王や女王たち、あるいは歴史的な英雄や悪魔を取り上げたテレビ番組はとても人気がある。しかし、プロデューサーが単純な物語的なものを求めているのに対して、歴史家は少なからず複雑性を好む傾向があり、こうした放送は学問研究の世界とはかなり距離がある。したがってメディアと学者の二つの世界を架橋することはむずかしい。そして今日では、「巨視的な歴史の奇妙な死」のために、それはいっそう困難となっている。

## II 段階論的な歴史

今日の学問的な歴史研究もいぜんとして大まかな区切りをもうけ、明示的ではないにせよ暗黙のうちに、歴史をいくつかの段階に分割している。

そこで第Ⅱ節ではこうした仮定が一般的になぜなされるのか—そして、こうした分割がどんな問題を投げかけるか——という疑問について検討する。

歴史は分けられた区切りという観点から、一般的に研究される。歴史研究は、時代ごとに、また時には（経済史、ジェンダー史のような）大きなテーマごとに、いくつかの部分に分けてなされるのが通例である。そしてこれらのテーマはさらに時代区分によって細分化される（中世経済史／近代経済史、前近代ジェンダー史／近代ジェンダー史）。都市の研究においては、都市独自の時代区分を示す試みがなされてきた<sup>14</sup>。しかし、一般的には標準的な区分法のほうが説得力があるので、都市史の時代区分も、古代／中世／近代という区分から離れられずにいる。

歴史を区分する手続きは、暗黙のうちにであれ、歴史研究を連続的な諸段階へとかなり大まかに再分割することになる。もっとも、すべての段階の始期と終期をいつにするかは個々の歴史家の判断に任されている（意味のある各段階の始期と終期をどの年代に求めるかに関しては、諸説紛々といった状態にある）。探求の単位として設定された時間の幅には長いものもあれば短いものもある。一般的に、新しい時代ほど史料が豊富になるので、想定される段階は短くなる傾向にあり、この逆もまた成り立つ。

知的に正当な根拠に基づくというよりも、通常暗黙のうちに受け入れられている歴史段階の一般的な三分法は、古代／中世／近代というものであり、現代に関しては、論争はあるにせよ、ポストモダンという時代区分を取るという選択肢もある<sup>15</sup>。あるいは、マルクス主義者にとっては、封建制／資本制／共産主義であり、さらに 1989 年以降の時期に関しては不本意ながらポスト共産主義段階を付け加えることもある<sup>16</sup>。

全体としてみて、こうした諸段階は学問的研究の科目編成に現れ、そのなかに組み込まれるようになってきているが、それをはっきり正当化するものはない。しかし段階区分は疑いもなく魅力がある。これによって特定の時期の一般的な特徴と史料に関する研究が可能となるだけでなく、ある段階の諸要素を次の段階の諸要素と比べてその違いを浮き彫りにできるようにする。こうした接近法は、それぞれの段階の明白な特徴を識別し、ある程度の一般化を行なうための要件を整える。段階理論あるいは時間的な距

### 3 歴史家と大きな歴史像への回帰

離を測ろうとする測距的 (*stadial*) なモデルは、歴史上のある時代に見られた事件や事例を他の時代のそれらとごちゃ混ぜにするような時代錯誤を犯さずに、歴史家が年代順に上手に配置し続けることをも可能にするのである。

さらに、こうした時代区分は、単線的説明もしくは循環的な説明どちらかにもあてはまることが暗黙のうちに前提されている。したがって枠組みは柔軟に適用可能なものである。進歩の（あるいは衰退）の物語が単線的に描かれるかそれとも大きな循環として描かれるかはともかく、一つ一つの段階の終わりは次の段階の始まりを画するものとして考えることができ、その結果、不可避な進歩（あるいは不可避な衰退）の筋書きではないにしても、事態が進行する道筋を示すことになる。さらに、そのように想定された諸段階の継起が、次には一般法則に還元されることになるのである。かくして、測距的な連続性のなかでは、その世界のなかの一つの国、あるいは地域が他の国や地域よりも先行していると見なされる。つまり「野蛮」から「文明」へ、「前工業化」から「工業化」へ、あるいは農村が支配的であった世界から「都市化」された世界へ、といったように。

しかし、十分に認知されてはいないが、段階論はそれ自体の問題を抱えている。まずこうした図式では、数千年を超えて持続する歴史の深部での連続性に対する認識が不十分である。むしろ、段階論は、一つの段階の終わりとは次の段階の始まりにおいてすべてのことが同時に変化するという、誤った考えを助長する傾向がある。このように、興隆に関するものであれ衰退に関するものであれ、すべての段階論にとって、歴史的な連続性を説明できないことは大きな致命的欠陥である。そして、これまで連続性についての理論化が、革命についての理論化に比べて、はるかに遅れをとった点に注意すべきである<sup>17</sup>。しかし、なんらかの定数なしに、変化の程度の相対的な大きさを測定することは不可能であろう。なんと言っても、アインシュタインの有名な方程式  $e=mc^2$  の核心にも定数  $c$ （光速）がある<sup>18</sup>。それゆえ、相対性理論のこの偉大な導師も、絶対的なものすべてを避けたわけではないのである。

歴史家にとって、確かに測距的なモデルは過去から現在の間で細分され



た、未来への選択肢も伴う、時間の積み木を提供してくれる。しかし、ことにそれがはるか先の未来にまで投影された場合には、段階論は検証が不可能である。時代から時代への大規模な飛躍をとまなう壮大な見通しは、SF では賞賛されるかもしれないが、詳細に見ると歴史的な具体性が欠如している。(例えば) 1963年にロシアの電波天文学者ニコライ・カルダチョフによって提起された三段階論を取り上げてみよう。彼の第一段階(K1)において、生命体はそのエネルギーを自分自身の惑星(我々の場合には地球)から獲得している。次の時代(K2)では、近隣の恒星(我々の場合には太陽)のエネルギーが利用される。そして最終のカルダチョフ段階(K3)では、銀河全体の資源が有用化される。やがては実現するかもしれないが、過去全体に関しては、石器時代からコンピューター時代まですべてが第一の 카테고리 K1 に入ってしまうので、この考えはまったく役に立たない。このような誇大な諸段階は一つの時代から他の時代を識別しないのと同然であり、役に立たない。今日誰がカルダチョフについて知っているかと、尋ねてみよう。知っているのは歴史家ではなく予知と SF の歴史の研究に没頭する人たちであるというのが答えである。

あらゆる段階論が孕んでいる問題は、諸段階の始まりと終わりを明確に規定する基準として何を選び取るかということである。選択はしばしば、選択する側の先入観によって左右される恣意的なものに見える。一つの要素に注目が集まると、他の重要な要素は無視されたり、過小評価されたりするだろう。興味深いことに、この点はかなり以前に、オズワルド・シュペングラー—古代、中世、近代という歴史の三分割法に対する手厳しい批判者であった—によって指摘されている。彼は、歴史に自分自身の関心を持ちこみ、そうした関心がすべての人間の発展を統べていると期待するのは、恣意的すぎると主張したのである<sup>19</sup>。

仮定された歴史の諸段階のはっきりとした特徴を見つける作業は、それゆえに厳密な科学の問題というよりは、価値判断の問題である。さらに議論のある論点も存在する。歴史における一つの段階がいつ始まり、いつ終わるかは自動的に明確になるわけではない。「近代」がいつ始まると考えられるか(そして、すでに近代が終わっていると信じるものにとっては、

### 3 歴史家と大きな歴史像への回帰

それがいつ終ると考えられるか) については、様々な歴史家の間で收拾がつかないくらい議論百出しているように見える<sup>20</sup>。

そしてこうした問題が存在するために、歴史においていくつの段階があるかを確定することは困難となっている。また、さらにいっそう重大なことに、どの要素が一つの段階からもう一つの段階へと移行する原因となるかを決定することも困難である。原理から言えば、測距的な理論の目的は歴史の複雑さに秩序を与えることである。そのために、選択される段階の数は比較的少ないのが通例である。時代区分があまりにも多すぎると、結局のところ複雑性はなくなる。したがってほとんどの理論において、段階の数は2から10程度の少ない数に集中しており、2、3、4といった数が最も好まれる<sup>21</sup>。しかし段階の数が少なすぎると、今度はあまりにも多くの複雑性が一つの段階に詰め込まれ、大きすぎて扱いにくくなる。

これは、すべてのものを一緒にするか、あるいは多過ぎるほど小さな部分に分けるか、そのバランスの問題であり、こうしたジレンマのために、段階論によって解決できる問題も多い一方で、引き起こされる問題も同じくらい多いのである。では結局、連続的な段階が語ろうと提案している歴史の全体像は何であるのか。次のような印象は避けがたい。すなわち、古代／中世／近代という<sup>トリアーデ</sup>三幅対が、学術用語としての意味をほとんど失い、歴史上の時間を1、2、3と表示しているに過ぎないように思われるにもかかわらず、いぜんとして生き残っている、という印象である。

### III マルクス主義の段階論

この第III節の議論では、すべての歴史段階論のなかで最も劇的な影響力をもった段階論へ立ち返ることが適切である。この理論は19世紀半ば、G. W. F. ヘーゲルの弁証法の影響を受けた知的な伝統のなかで活動していたカール・マルクスとフリードリッヒ・エンゲルスによって生み出された。時間を超越した革命的な転換という彼らのモデルは広く知られている。歴史の一段階は劇的な動乱の後、次の段階へと道を譲るとされている。そしてこのことはすべて規則的に連続して、また——特定の時に——地球全

体で起こるとされている。

他の測距的なモデルと比較して、マルクス主義のそれはかなりの評価に値する。その解釈は完成度が最も高く、現実への適用にも十分耐える。願望の実現という要素を確かに含んでいたが、マルクスとエンゲルスはまた、それに基底的な枠組みを与えようと努めた。彼らはそれぞれの段階の違いを経済学的に規定することによって、彼らのいうシステムを識別できる基準、つまり「生産様式」を提供した。彼らはまた、変化を説明しようと試みたのであり、単に変化を当然のこととして臆断していたわけではない。その上で彼らは、それぞれの段階が革命的な転換を経験することになるだろうと論じた。経済の成長や変化はそれぞれのシステムの内部で矛盾を生み出す。こうした矛盾は最終的に内部で爆発することになるだろう。そして新しい段階が古いものを押しつけて出現するというわけである。このようにマルクス主義のシステムには歴史的推進力が組み込まれているのである。

確信をもった信仰者たちは、この歴史的なモデルの強みに立てば、過去を理解するだけでなく、未来を予言することもできると考えた。直近の政治的な出来事はその通りに進まないように見えても、マルクス主義者たちは落胆しなかった。彼らは自分たちが深遠な歴史法則の鍵を握っていると信じた。確かに、多くの共産主義者の指導者たちは、権力の座にあるときには、あらかじめ定められていると彼らが信じた方向へ社会を押し動かすために、何のためらいもなく厳しい政治的な決断を下した。歴史研究にその考えを適用しようとしたマルクス主義者にとって、人生の複雑さをきわめてわずかな数の段階へ無理やり押し込めることには問題があるだろうとは、当然予想されるどころだった。かなりの議論の末、スターリンはこのシステムを公式化した。それをおこなう際に、マルクス主義の理論家ニコライ・ブハーリンの裏舞台からの助言にも依存していたようだ。ともあれ、それぞれのペースと時期に応じてではあれ、すべての国が辿ることになる枠組み提供する5段階論が出現した。諸段階は、第一に部族制もしくは原始共産主義（分担された労働）、続いて「古代」世界（奴隷労働）、そして「封建制」（農奴労働）へと続き、「資本主義」（賃労働）へと向い、

最後に社会主義／共産主義（共同労働）に至る。

様々な代替案が次々と提案された。現実の史実にこうした段階をまじめに適用しようとしたマルクス主義歴史家たちは、この定式化がきわめて限定的にしか適用できないことを悟った。そこで資本主義を「商業資本主義」（貿易）と「工業資本主義」（工場制）へと再分割することが提案された。しかし、スターリンはこうした修正主義を叩き潰した。

同様にスターリンは東洋の社会にもう一つ別の段階を提案することも断固として拒否した。アジア的生産様式（直接的な国家による労働の支配）は史実により合致するもののように思われた。中国史は西欧の歴史とはさまざまな重要な点で異なっていた。インド、中央ユーラシア、サハラの内と南のアフリカ、南米、そしてオーストラリアなど世界の多くの西欧以外の国々の歴史はいうまでもなく、日本に関しても同様であった。

しかし、変種の考えがあまりに多くなると、ますます多くの異なった歴史の道筋を創り出すことになる。そして、全体の図式があいまいになると、歴史の革命的な道は、西欧においてさえ歴史的に著しく偶発的なものになり、かならずしも必然的なものではなくなってしまうだろう。

結局のところ、過去は複雑であり、それを普遍的に繰り返されるような少数の段階に閉じ込めるのは確かに困難であった。西欧のマルクス主義歴史家は、独断的な言い方をするスターリン主義正統派よりも、ずっと真正面から歴史と歴史的研究に取り組んだ。しかし彼らの最良の努力によってさえ、見解の一致に至ることはできなかった。例えば英国では、マルクス主義の根本に最も大きく関わる歴史上の画期についてさえも共通認識はない。よく知られた封建制から資本主義への移行はいつだったのか。ロドニー・ヒルトンの言うように、農奴制の解体した 15 世紀であったのか。あるいはクリストファ・ヒルの言うように、チャールズ一世の処刑と封建的授封関係が廃止された 17 世紀中葉なのか。もしくは E.P. トムソンの言うように、アダム・スミスや自由市場のイデオロギーが登場する前夜である 18 世紀後半であったのか。あるいはエリック・ホブズボームの言うように、「高度資本主義」のヴィクトリア時代半ばなのか。

影響力のある真摯なマルクス主義歴史家の間にさえこれほど多くの

### 3 歴史家と大きな歴史像への回帰

異なった考え方がありうることは、基本的な概念があまりに単純化されすぎて説得力がないことを示すものだった。経済史においてすら、大きな困難が存在した。研究の領域が広がるにつれて、マルクス主義の段階を適用することはますますむずかしくなっていた。だから、フェミニストの研究者は（例えば）封建的女性から近代的な女性のあり方への進歩を見出すことが困難であると気づいた。それとも、そもそもそれがはたして意味のある歴史的問題提起だったのだろうか。

同様に、都市史が 1960 年代以降の戦後の興隆期を迎えたとき、多くの都市史家は、漠然としたマルクス主義あるいはマルクス主義風の歴史の時間枠と、最新の研究によって発見されてきたこととが、まったく両立し得ないことを知った。時代を超えた都市の役割には、革命的な移行という普遍的なモデルによって説明されない根本的な連続性があり、と同時に、都市の大きさや数には、この革命モデルにはそぐわない漸進的な変化が見られるのである。

過去への適用においても 20 世紀の政策決定においても、マルクス主義はその唱道者が期待している単純な解答を実際に与えてはいない。農村の単純性の名のもとに都市住民を農村に強制移住させる場合（中国の毛沢東）であろうと、社会主義発展の名のもとに農村住民を新しい都市へ強制移住させる場合（ルーマニアのチャウシェスク）であろうと、さまざまな共産主義指導者によって採用された都市生活に対するまったく正反対の態度は、理論的なジレンマがあることを実践のなかではっきり示している。どちらの政策も機能しなかった。そして、どちらも我慢できないほど横暴であった。こうしたことは、歴史の上でパターンを見出そうとする探求が、既定のパターンのなかへ歴史を無理やり押し込めようとする試みに、いかに易々と変わっていくかを示している。そして、マルクス主義の例は、合意された歴史的な枠組みでさえ、望ましい成果に到達するための正しいやり方については、きわめて多様な解釈に至りうることを逆説的に物語ってもいる。

もし質問が、歴史に関するマルクス主義の諸段階について誰か知っているか、というものであれば、誰でも知っていると答えるだろう。詳細を知

らなくとも、革命を通じた変化という考え方は理解している。不完全ではあっても、強力な洞察である。しかし、マルクス主義的な段階論的歴史の必然性を信じている者がいるかと問うならば、答えは変わって、信じている者はほとんどいないとなろう。マルクス主義になお共感を保っている歴史家であっても、「下からの歴史」に集中する傾向がある。彼らは大衆の苦しみと抵抗に関する証拠を提出するが、諸段階の必然性については議論しない。かくして古代／封建制／資本主義というマルクス主義的な図式の崩壊は、結局、時代区分の問題を古代／中世／近代という区分に委ねることになった。だがこの時代区分もまた内実を欠いたものである。

## IV 結論

こうした困難にもかかわらず、歴史家はなお大きくものを考える必要がある。最近の歴史に関する知識の状態はこれまでよりも充実し緻密であり、我々はより豊かで精巧、しかもよりよい—そして疑いもなくより複雑な—人間の歴史を描き出すことができる状況にある。ある一つの時代を専門とする歴史家は、彼らの特殊なデータ、特殊なテーマ、特殊な時代がいかに組み合わせられているかを議論するためには、他の時代を扱う歴史家に語りかけねばならない。すでに述べたように、不確定性と無作為性しか強調しないポストモダニストの見解には説得力がないことは明らかである。「啓蒙のプロジェクトの死滅<sup>22</sup>」について述べたポストモダニストは、ある形の連続する歴史的な物語<sup>ナラティブ</sup>を自ら提供してもいるのである。

いまや、過去の出来事を長期の見通しのなかに再配置する、「大きな歴史」へ回帰する動きがある。この動きは歴史家が現在おこなっていることを終わらせるためではなく、共時的な研究の豊かさをさらに増すことを企図しているのである。時代区分の新たな見方を推奨している歴史家の一つのグループには、例えば、新たな「グローバル・ヒストリー」のなかでの文化の出会いを研究している人たちがいる。その目的は、一つの文化あるいは伝統の「時間表」のなかへ人間の歴史を閉じ込めるのではなく、人

### 3 歴史家と大きな歴史像への回帰

間の歴史全体を見渡すことである。そして、そのような閉じ込めを避けるために、歴史家の会議や研究会に関わりをもつ必要性はとりわけ高いのである<sup>23</sup>。

この地球規模での討論に対する私の寄与は、長期の歴史 *history longitudinally* に関する新しい思考方法にある。連続性、漸進的な変化（マイクロ変化）、そして基底的な転換（マクロ変化）に関する証拠に目配りするこの私の方法は、すべての時代に適応することができる。これらすべてがあらゆる時代に見出されるはずであると主張するつもりはない。しかし、この接近法は歴史の全体像が三つの次元からなっていることを議論している。空間が区切りのない三つの次元（縦、横、奥行き）をもっているのとちょうど同じように、歴史を包摂している時間も三つの区切りのない次元を統合している。それらは連続性、マイクロ変化、マクロ変化、もしくはより抽象的に言うならば、持続、趨勢、そして動乱である<sup>24</sup>。議論に参加し来て欲しい！人間の歴史が一多くの歴史、でなく人間の歴史が一招いている。

【註】

- 1 あまりなじみのない素材に関する鋭い質問と懐疑的な議論を提供してくれた東洋大学および比較都市史研究会（2007年5月）の聴衆の方々に特別の感謝をささげる。
- 2 C. Lamb, Letter to Thomas Manning, 2 Jan. 1806, in E. W. Marris (ed.), *Letters of Charles and Mary Lamb* (1978), Vol. 3.
- 3 時間の完全な定義と時 - 空の概念については、P. J. Corfield, *Time and the Shape of History* (2007), 特に pp. xv-xix, 12-16 (Time-space)を参照。
- 4 D. S. Landes, *Revolution in Time: Clocks and the Making of the Modern World* (2000), p.202. 1 アト秒は  $10^{-15}$  で、人間が瞬きすることもできないぐらい短い時間の長さである。
- 5 構造主義は学派というよりも接近法である。その主要な研究分野は言語学、記号論や文化人類学である。しかし構造主義的マルクス主義、構造主義的フェミニズム、そして構造主義的歴史を確立しようとする試みもある。M. Sarup, *An Introductory Guide to Post-Structuralism and Postmodernism* (1988;1993)を見よ。
- 6 ポストモダニズムについては以下の文献で学ぶことができる。M. Drolet (ed.), *The Postmodern Reader: Foundational Texts* (2003). また歴史研究に対する適用については特に K. Jenkins, *Re-Thinking History* (1991) (岡本充弘訳『歴史を考えなおす』法政大学出版社、2005年); idem (ed.), *The Postmodern History Reader*. そして A. Munslow (ed.), *The Routledge Companion to Historical Studies* (2000)を参照。
- 7 多くの拒絶のなかで歴史家によって書かれたものは、R. Evans, *In Defence of History* (1997) である。また S. Gunn, *History and Cultural Theory* (1991)も参照。
- 8 N. Roberts, *The Holocene: An Environmental History* (Oxford, 1998). この分野では他に C. Ponting, *A Green History of the World* (1991)があり、同著作は *World History: A New Perspective* (2000)として増補されている。
- 9 F. Fukuyama, *The End of History and the Last Man* (1992) (渡部昇一訳『歴史の終わり (上) (下)』三笠書房、1992年)。
- 10 A. J. Toynbee, *Cities on Move* (1970) (長谷川松治訳『爆発する都市』社会思想社、1975年)は「来るべき世界都市」を人間的なものとする必要に関しては雄弁であったが、連合王国のオックスフォードのような伝統的な都市中心部については、再生されるべきものとしてとても悲観的であった。



- 
- 11 A. J. Toynbee, *Mankind and Mother Earth: A Native History of the World* (Oxford, 1976).
- 12 G. J. Renier, 'Toymbee: A Study of History' (1950), reprinted in M. F. A. Montagu (ed.), *Toynbee and History: Critical Essays and Reviews* (Boston, Mass., 1956), p.76.
- 13 アーノルド・J.トインビーに一度は与えられて注目に関しては、例えば E. T. Gargan (ed.), *The Intent of Toybee's History: A Cooperative Appraisal* (Chicago, 1961) および上の注 12 に引証したモンタギュ編の書評集を参照。
- 14 とりわけ, G. Rozman, *Urban Networks in Russia, 1750-1800, and Premodern Periodisation* (Princeton, 1976), また同、*Urban Networks in Ch'ing China and Tokugawa Japan* (Princeton, 1973) を参照。
- 15 近代主義のトリアーデに関する批判に対しては、Corfield, *Time and Shape of History*, pp.131-148 を見よ。また T. K. Rabb, 'Narrative, Periodization an the Study of History', *Historically Speaking: Bulletin of the Historical Society* [Boston University], Vol. 8 (2007) .
- 16 マルクス主義の諸段階に関する包括的批判については、Corfield, *Time and Shape of History*, pp.178-83 を見よ。
- 17 連続性の理論に関する最も雄弁な最近の歴史家は、疑いもなくフェルナン・ブローデル (1902-85) である。彼は歴史地理学もしくは地政学の深い継続性に強調点を置いている。  
彼自身、彼の知的な仮定に関する最も明敏な研究の一つ一つは、ヘクスター (J. Hexter) による論文 *On Historians* (Cambridge, Mass., 1979) でなされていると述べている。しかし、ブローデルの地理的な継続性のモデルは、(a) 深い地理的なものの中にさえ存在する変化の範囲を、(b) 時間を越えた歴史の他の局面における深い継続性の可能性を、過小評価している。
- 18 アインシュタインの公式は E (エネルギー)、M (質量) そして C (*celeritas* = ラテン語で速度、1 秒間に 30 万キロ弱という真空中の光の定常的な速度で量られる)。
- 19 Corfield, *Time and Shape of History*, p.184 に引用。
- 20 *Ibid.*, pp. 131-48.
- 21 歴史の段階論に関する最も人気のある数についての再検討は、*Ibid.*, pp.164-73 でおこなった。
- 22 「啓蒙のプロジェクトの死滅」を祝うことはポストモダニズム的思想のきわめて論争的な部分での言明である。けれども、最近の批評では「ポストモダニズムの死滅」への論評に対する敬意へと戻り始めている。あるいはそれは別に、ポストモダニズム思想は実際に到達できるものとしてではなく、「しかしむしろ具体化しなかった奇妙な未来の歴史へと

---

横滑りしていくもの」として見られている。G. Myerson, *Ecology and the End of Postmodernism* (Cambridge, 2001), p.74 を見よ。

<sup>23</sup> 例えば、2007年11月16、17日に合衆国カリフォルニア州フラートン (Fullerton) のカリフォルニア州立大学でカリフォルニア世界史協会 (CWA) によって組織された「つながる時間,空間そして歴史」という学会のプログラムを参照。

<sup>24</sup> この主張を支持する議論は、Corfield, *Time and Shape of History* の各所にある。他の潜在的なモデルに関しても、F. E. Manuel, *Shapes of Philosophical History* (1965)、および E. Zerubavel, *Time Maps: Collective Memory and the Social Shape of the Past* (Chicago, 2003) における議論と同様、コーフィールドの前掲書で再検討している。

## 著者

ペネロピー・J.コーフィールド Penelope J. Corfield

ロンドン大学、ロイヤルホロウェイ校、歴史学教授

主著：*The Impact of English Towns 1700-1800* (Oxford University Press, 1982)(坂巻清／松塚俊三訳『イギリス都市の衝撃 1700—1800年』三嶺書房、1989年)；*Power and the Professions in Britain 1700-1850* (Routledge, 1995)；*Time and the Shape of History* (Yale University Press, 2007).

## 訳者

小西 恵美 専修大学経済学部准教授

山本 千映 関西大学経済学部准教授

菅原 秀二 札幌学院大学人文学部教授

中野 忠 早稲田大学社会科学部教授

道重 一郎 東洋大学経済学部教授

唐澤 達之 高崎経済大学経済学部教授